

# 茨城県太平洋岸における中世の海村について

## —製塩主体の海村の一類型—

永越 信吾

総合研究大学院大学 文化科学研究科 日本歴史研究専攻

### 要 旨

本稿は、茨城県太平洋岸の製塩を主要な生業とする中世の海村について考古学の視点から考察するものである。海村は立地環境や利用可能な資源から様々な様相が想定されるが、ここでは茨城県中部の太平洋岸の砂丘上に立地する3つの遺跡について検討した。

釜屋、鹹水槽などの製塩遺構は海岸に近い場所にあり、海岸付近での塩田と一体となった製塩の場が考えられた。集落跡が確認できる村松白根遺跡では、製塩が行われていた場所よりもやや内陸側に建物が建てられた。建物跡では釜屋内で海水を煮詰めた土釜の部材である耳金、吊金が出土していることから、製塩に従事した人々が暮らしたことが確認できた。

村松白根遺跡の集落の期間は15世紀後半～17世紀前半で、当初は建物が散在していたものが、15世紀末～16世紀前半になると複数の建物に纏まる様相が看取された。この建物の棟数が増えた背景として製塩従事者の増加と、複数の集団が組織されたことを考えた。16世紀後半には、建物跡の方向がほぼ同じとなり、建物が整然と配置された形態となる。これに土手状の区画を伴う。そうした計画的な建物配置は17世紀前半まで続いた。各時期を通して、建物は1棟ないし主屋と付属建物から成る2棟構成であり、これが1家族の居住形態と考えた。

製塩遺構は集落の形成された時期から衰退期まで同一個所で変遷しており、製塩に必要な海水を得やすい海岸に近い所で製塩が行われていたことが分かる。

集落の居住者を埋葬した土壙墓もみられ、それらは群を成している。被葬者は乳幼児から老人まで確認でき、家族を埋葬した墓であることが分かる。副葬品には突出した優品はなく、集落居住者の階層は比較的均一であったと考えられる。

沢田遺跡、長砂渚遺跡でも釜屋や鹹水槽といった製塩遺構、土壙墓がみられ、集落跡は未確認であるが、村松白根遺跡と同様に製塩を主体とした海村と捉えることができる。

生業は製塩を主体とするが、集落内では骨角加工、鍛冶、漁撈、農耕等が副業的に行われていた。こうした複数の生業が海村の特徴の1つに挙げられる。村が単一生業のみで成り立つものではなかったことを示すものである。本稿では、砂浜沿いの製塩主体の海村について検討したが、このような村でも、複数の生業が確認でき、多様な生業の上に村が維持されていったことが考えられる。これを製塩主体の中世海村の一類型として提示したい。

キーワード：海村、製塩、集落、複数生業、埋葬地

はじめに

1. 茨城県中部における製塩主体の海村
2. 村松白根遺跡における集落、生業、埋葬
  - 2.1 集落形態・集落構造
  - 2.2 生業
  - 2.3 埋葬地
  - 2.4 小結—村松白根遺跡の特徴—

3. 沢田遺跡における生業と埋葬

- 3.1 生業
- 3.2 埋葬地
- 3.3 小結—村松白根遺跡との比較—

4. 長砂渚遺跡の生業と埋葬

まとめ

## はじめに

日本列島は四方を海で囲まれており、中世の村落を考える場合、海岸部の村とそこにおける生業に注目する必要がある。白水智氏は中世村落の研究が農業中心であり、農村や農民が村落や住民を指すことが一般的となっていることに疑問を呈した上で、海岸部の村は漁村と位置付けるだけでは不十分と述べ、漁業以外の生業も含めた「海村」という民俗学で示された概念<sup>1)</sup>が白水氏らによって歴史学でも使われるようになった。海村の生業として、塩業、漁業、廻船業、水産加工の商品化とその交易、農業を挙げている(白水 1993)。

こうした多様なあり方は、白水氏以前に網野善彦氏が海民として漁撈や製塩、廻船、交易に関わる非農業的生業に従事する人々が多かったことを指摘している(網野 1984)ことに共通している。網野氏は塩の荘園として著名な伊予国弓削島荘も製塩、漁撈、海上交易の従事者が一般的であったと述べており(網野 1995)、複数の生業の上に村が成り立っていたことを考えることができる。

また、春田直紀氏は農業村落とは異なる海村の生業暦を明らかにし、海村の多様な生業<sup>2)</sup>が解明された。生業の期間、季節性等から各海村の生業を整理し、海村を4つに類型化している(春田 2010)。いずれの類型にも製塩があることが特徴である。これは製塩が海村において広く行われていたことを意味する。春田氏の考察によ

れば、海村の製塩は各村によって操業期間が異なっている。3月～8月という期間が限られていた海村がある一方、1月や12月の休浜以外は長期の製塩が続けられていた事例も確認されている。

白水氏、春田氏らが論じたのは史料の恵まれた若狭湾一帯での動向であるが、東国においても室町時代、東京湾内において製塩が行われていたことが盛本昌弘氏によって明らかにされている(盛本 1989)。その後の戦国期は後北条氏領国内の海村に塩の負担があり、また内陸部では萱野塩場役が課せられており、製塩に必要な薪が採取されてもいる(盛本 1994)。こうした諸役から、戦国期に製塩が広範に行われていたことが窺える。

中世の製塩に関しては、網野氏(網野 1980, 1985)、渡辺則文氏(渡辺 1971, 1980)らの研究がある。網野氏は製塩従事者について平民百姓、職人、下人・庶従の3つの身分を考えている。平民百姓には有力者を含む百姓層、職人は寺社に掌握された製塩を職掌とする人々、下人・庶従は海辺の領主や職人の一部、平民百姓の首長に属したと想定している。渡辺氏は中世段階では入浜、揚浜の2つの製塩を指摘している。

集落を軸に村落研究が進められてきた考古学も、農業が論点の中心であった。例えば、森格也氏が中世集落に漁村が含まれることを踏まえつつも、生産関係の遺構、遺物がみられなければ発掘された遺跡の殆どは農村と認識されている(森 1993)のが考古学の現状である。歴史学

における中世海村研究の進展に比べ、考古学では海村<sup>3)</sup> 研究に対する取り組みが遅れている。その原因は中世の海村に関わる集落と生業を認識できる遺跡が極めて少ないことにある。海村の生業の1つである製塩も、縄文時代から古代までの研究は進められている<sup>4)</sup> が、中世に関しては廣山堯道氏の研究（廣山 1983）等の少数の研究にとどまっている。そこで、本稿では考古学の視点で海村を捉えようとした場合、どのような様相が見出せるのかを考えてみたい。上記の先行研究から、海村では多様な生業が考えられるが、本稿では製塩が主要生業の海村に焦点をあてることで海村の一類型を捉えていきたい。前述のように、中世の製塩に関わる考古学の調査事例や資料は不足しているが、少ない資料の中でも海村を考古学の視点からアプローチすることには一定の意義があろう。幸いにも、茨城県中部において製塩に関わる集落や製塩遺構が把握できる発掘調査が行われた事例があり、それを基に集落<sup>5)</sup> や製塩遺構の形態を把握したい。また、製塩以外の生業にも目を向け、どのような生業が行われていたのかを考察する。さらに、集落住人の墓も分析の対象とする。それによって、集落、生産、埋葬地を一体的に把握し、中世の海村の様相を捉えることを目的とする。

## 1. 茨城県中部における製塩主体の海村

海岸部において製塩を主体的に行っていた場所として、茨城県中部の東海村、ひたちなか市の太平洋岸における中世の製塩遺跡がある。管見では、中世の集落跡と製塩遺構を合わせて把握できるのはこの地域の遺跡のみである。

東海村の村松白根遺跡（15世紀後半～17世紀前半）、ひたちなか市の沢田遺跡（15世紀～17世紀前半）と長砂渚遺跡（15世紀～16世紀中葉）で製塩遺構が検出されている。最も北に所在する村松白根遺跡から南に向かって2km間隔で長砂渚遺跡、沢田遺跡が位置する（図1）。以上の3つの遺跡は揚浜の製塩と推定される。揚浜での

製塩は砂浜に海水の塩水を撒いて、天日干しにした塩混じりの砂をさらに海水を掛けることで濃度の濃い塩水とし、さらに濾過、濃い塩水を煮炊きし、にがりを分離して塩を取り出す（たばこと塩の博物館 2015）。揚浜は日本海側では出羽、越後、能登、若狭、太平洋側では常陸、下総、駿河、土佐、長門、大隅等で行われていた。

村松白根遺跡、沢田遺跡、長砂渚遺跡は、いずれも海岸沿いの砂丘上に立地する。このうち、村松白根遺跡では集落、製塩遺構、墓が検出されており、これらを一括して捉えることができる。沢田遺跡では製塩遺構と墓が検出されているが、集落は確認されていない。おそらくは調査区外に居住地があったと推定される。長砂渚遺跡でも製塩遺構と墓が検出されている。長砂渚遺跡は調査面積が他の2遺跡に比べて狭いこともあって、遺構の数は少なく部分的な検出に留まるが、類例として検討の対象とする。これらの遺跡は、製塩操業の場、製塩従事者の集落と捉えられている（茨城県立歴史館 2012）が、本稿ではそれをさらに進展させ、当該地域の中世海村のあり方を論じることにはしたい。はじめに村松白根遺跡の事例から、集落と生業、埋葬地を確認する。次に、村松白根遺跡と同じ立地である沢田遺跡と長砂渚遺跡から共通点を見出し、ていく。

## 2. 村松白根遺跡における集落、生業、埋葬

### 2.1 集落形態・集落構造

村松白根遺跡の集落の存続期間は15世紀後半～17世紀前半である。以下、発掘調査報告書（財団法人茨城県教育財団 2007a）で示された遺構の時期変遷を基に集落の推移と形態を検討していく。

#### (1) 集落の推移

遺構はⅠ期（15世紀後半）、Ⅱ期（15世紀末～16世紀前半）、Ⅲ期（16世紀後半～17世紀前半）の3時期に亘り変遷している（図2）。生活の場は、

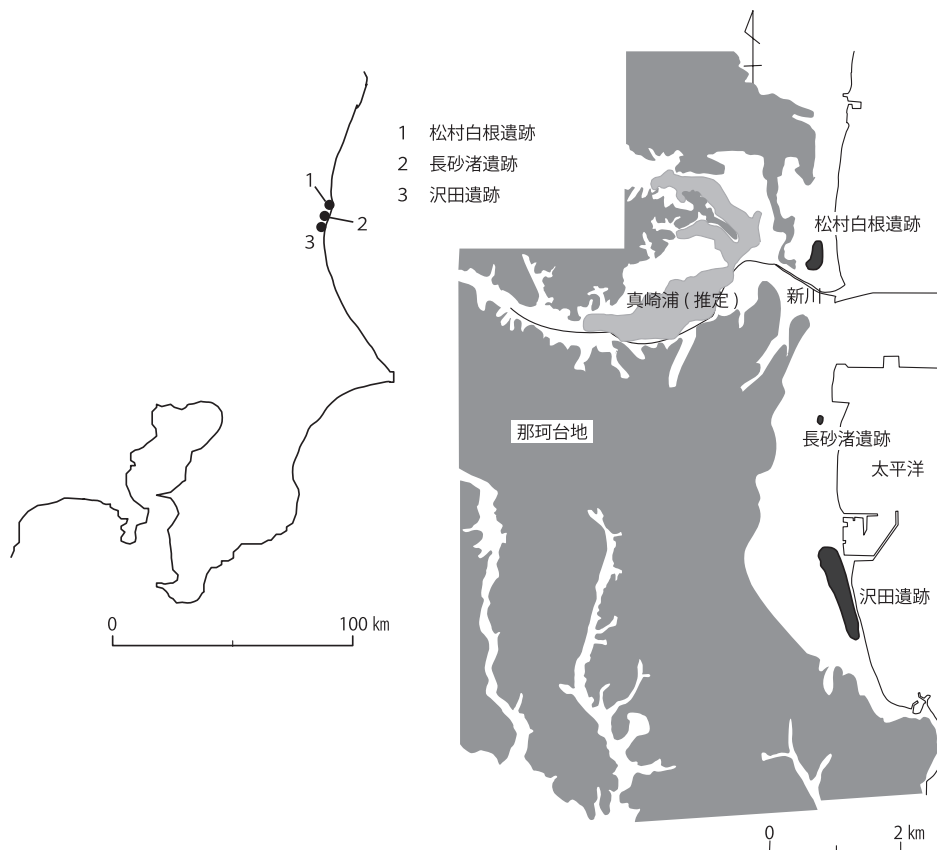


図1 遺跡の位置

調査区北部→調査区中央部から西部の一帯→調査区南部へと位置が変わっていった。製塩遺構は、調査区北部から東部に集中している。Ⅰ期は建物跡、製塩遺構の数は少ない。操業開始期は生産の場と集落が比較的小規模なものであったようである。Ⅱ期～Ⅲ期は建物が増えて集合した形となる。一方、主要生業である製塩は全期間を通して調査区の北部から東部で行われていた。居住地とは違い場所の変化は殆どなかった。

## (2) Ⅰ期における集落の様相

この時期に建物が出現した。調査区北部に南北120mの範囲に建物跡が分布する。建物跡の南側には南北50mの範囲に製塩遺構が分布する(図3)<sup>6)</sup>。集落の規模としては後のⅡ期、Ⅲ期に比べると小さい。当該期の建物跡は、第14・18・19・20・28・29号建物跡である。これらの建物跡はいずれも黒色土による整地面(厚さは数cm

～10cm)を伴う。この整地面は後の時期の建物跡、製塩遺構においてもみられ、砂地という環境故に地盤安定のために造成された。大抵の建物跡には炉を伴う。炉の用途は不明とされるが、火を使う何等かの作業が行われていた痕跡であり、日常生活あるいは手工業生産に関わるものと思われる。

Ⅰ期の中心的な建物は第14・19号建物跡である(図4)。第14号建物跡は柱穴4基が一行に並び、硯や分銅が出土しており、製塩の管理者の建物との見解が示されている(財団法人茨城県教育財団 2005)。第19号建物跡は上下2つの整地面が確認されている。上層の第1次面は東西11m、南北8mでL字状を呈する。こうした整地面の形状から曲屋であった可能性がある。整地面南側には貝集積がある。海水、淡水の生息貝がみられるが、ウバガイ(ホッキガイ)が多い(重量換算で全体の約95%ウバガイが占める)。ウバガイ

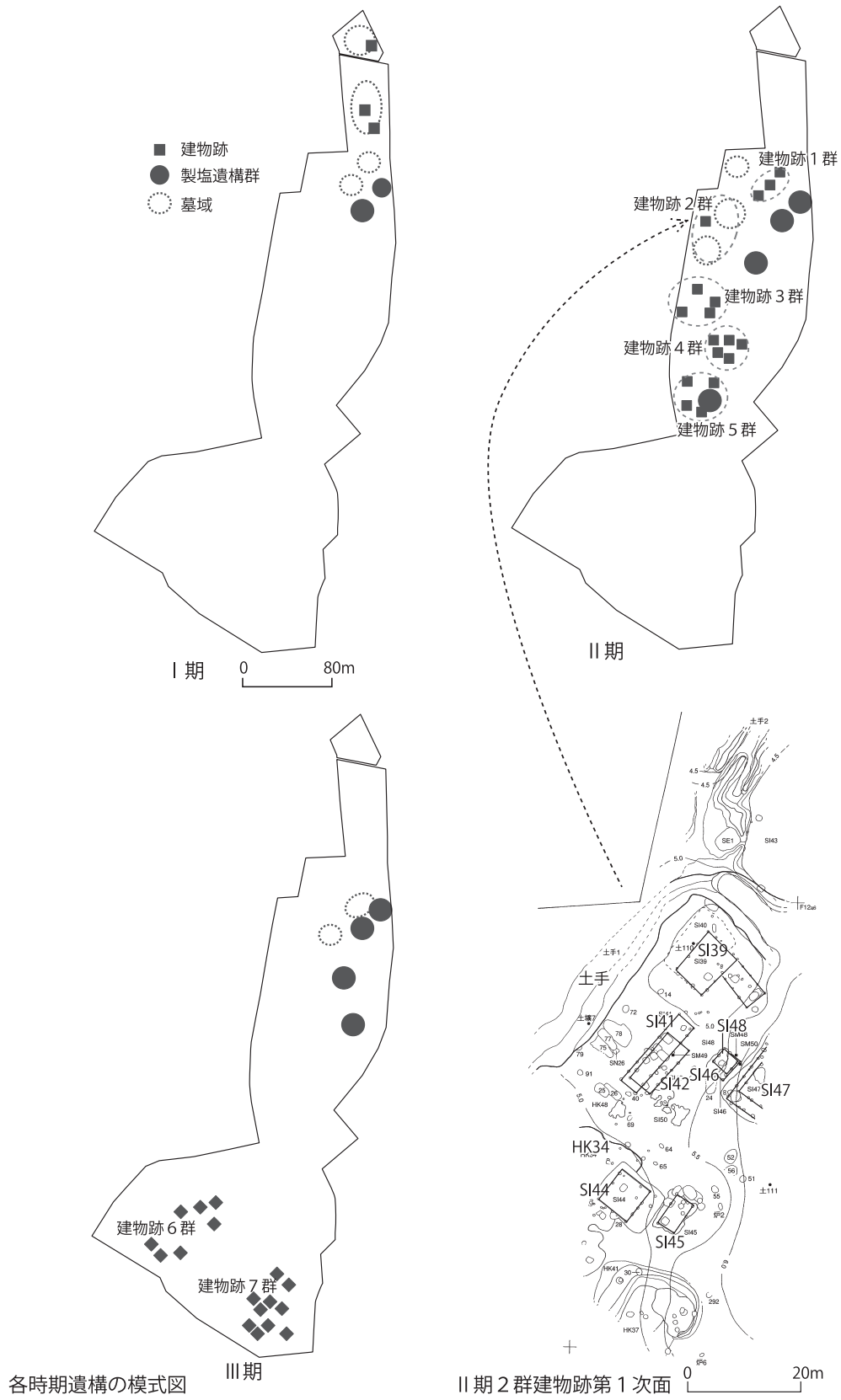


図 2 村松白根遺跡の遺構変遷

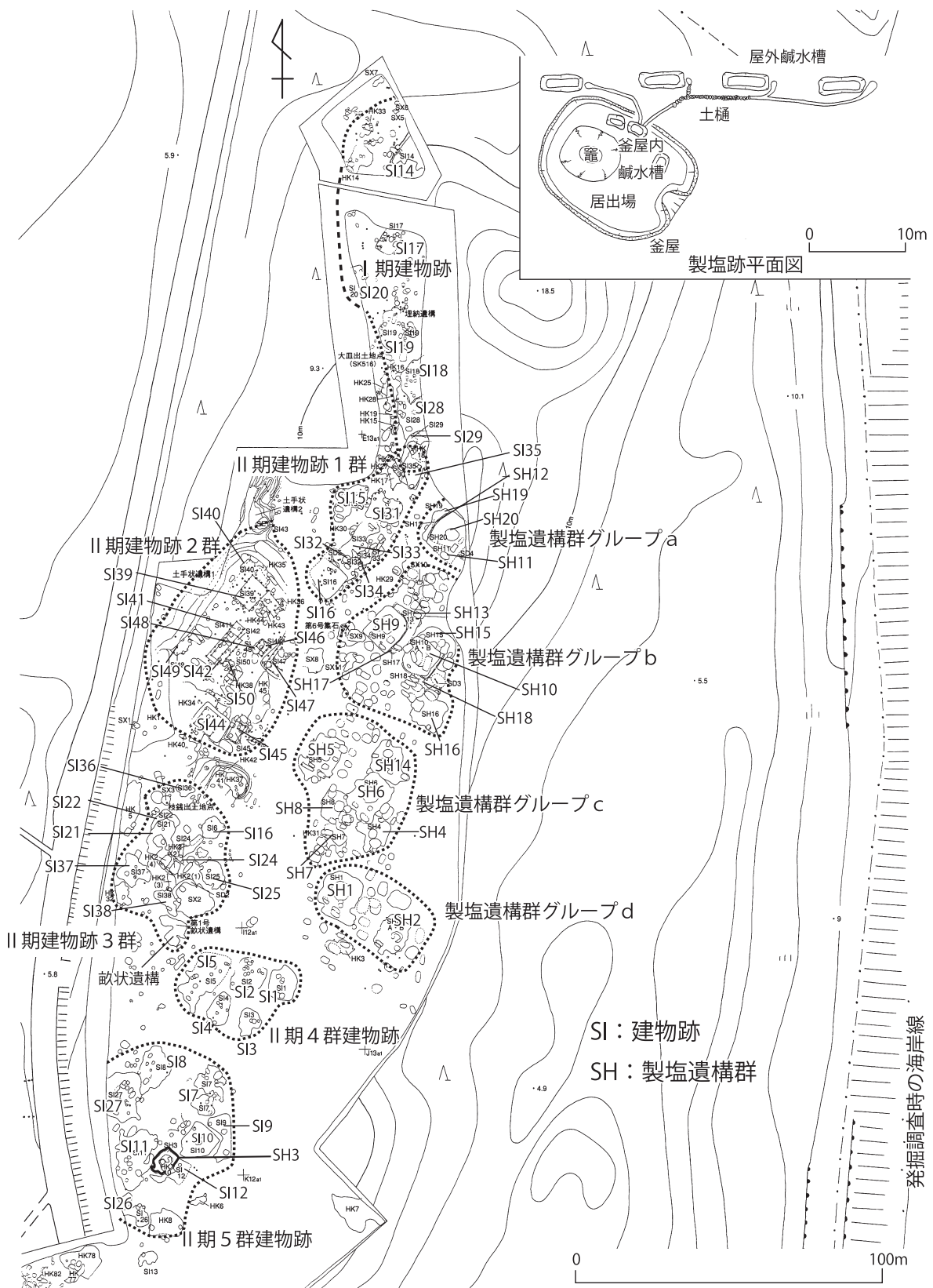
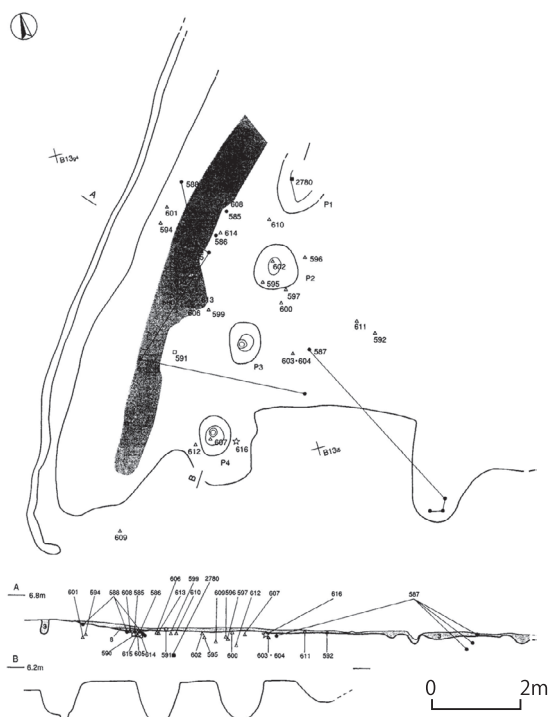
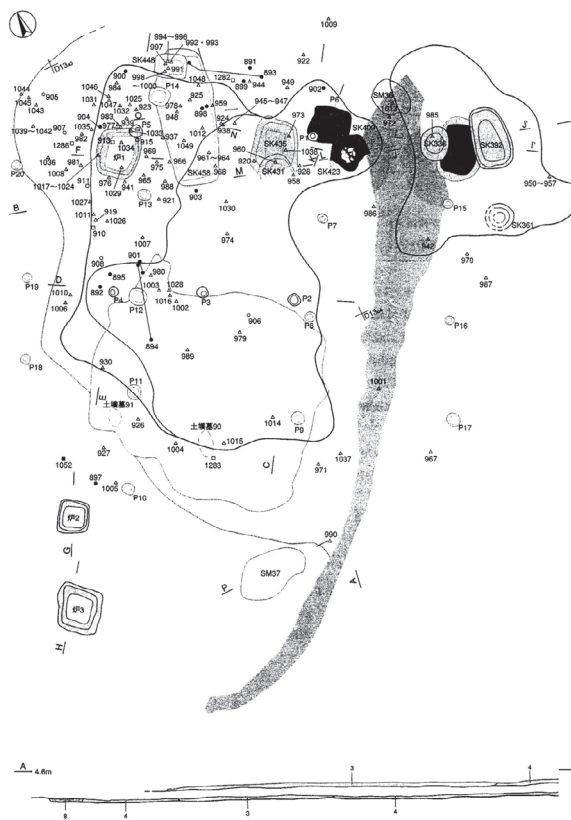


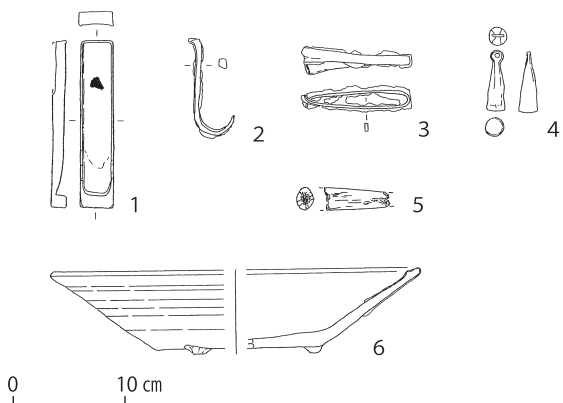
図3 I期・II期の建物跡群 製塩跡



第14号建物跡

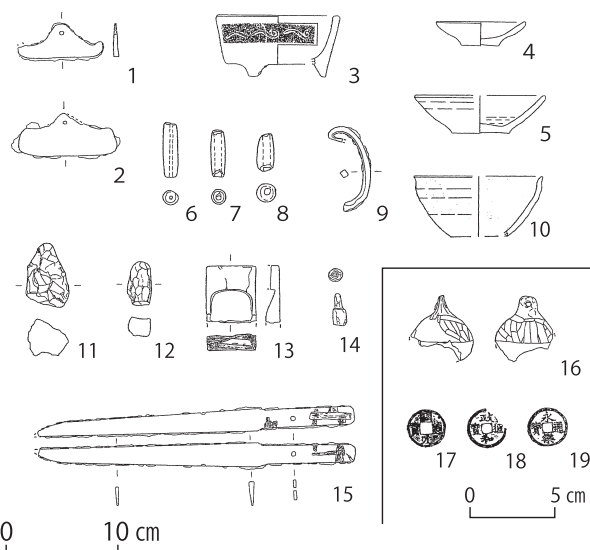


第19号建物跡



第14号建物跡出土遺物

- 1 硯 2 吊金具 3 毛抜き 4 分銅
- 5 骨角未成品 6 瀬戸・美濃折縁深皿



第19号建物跡出土遺物

- 1・2 火打金 3 土師質土器香炉 4・5 かわれけ
- 6・7・8 土錘 9 耳金 10 瀬戸・美濃天目碗
- 11・12 火打石 13 硯 14 骨角製品 15 短刀 16 土鈴
- 17・18・19 銭貨（開元通寶 政和通寶 永樂通寶）

図4 第14・19号建物跡

は茨城県以北に生息しており、付近で採取したと考えられる。こうした貝集積はⅡ期以降も確認できる。この建物跡では、多数の遺物が出土している。そのうちの多くはかわらけ（土師質土器皿）等の土器類であるが、土錘、硯、火打金、火打石、土鈴、耳金等もみられる（図4）。耳金は釜屋で使用された部材であり、製塩の従事者が居住したことが窺える。また、銅銭が104枚出土している。第19号建物跡近くでは銭の緡が5束、総計約380枚出土しており、この建物跡と関連するものと考えられている（茨城県立歴史館 2012）。村松白根遺跡では銭貨の出土した建物跡が多く、この集落の特徴の1つに挙げられる。海村は生産物を交易することで銭貨が入手しやすかったとされ（盛本 2009）、生産した塩の出荷と銭貨流入が相関していたと言えよう。銭貨が多いのは、塩が商品的価値を有していたことを証左するものであろう。

また、第18号建物跡も、かわらけ、内耳土器、瀬戸・美濃陶器、茶臼、小刀、釣針、土錘、鹿角の未成品、銭貨、土鈴等多様である。

I期の建物跡は標高3.4m～6.3mで検出されており標高差がある。したがって、I期に括られている建物跡には時期差があると推定される。例えば、第18号建物跡と第19号建物跡は近い場所に位置するが、前者が標高5.2m、後者が標高4.3mで、約1mの高低差がある。こうした標高の差はI期の建物が同時期に並存したのではなく、I期はさらに時期が細かく分かれる可能性がある<sup>7)</sup>。出土遺物からは詳細な時期差を見出すことは出来ないが、少なくとも第18号建物跡は第19号建物跡に先行するものであろう。このように捉えるとI期の建物跡は分散した状況を呈し、建物跡が孤状に存在したと考えられる。

I期の集落は、製塩を目的にその従事者の居宅が建てられた。出土遺物から第14・19号建物跡は集落の中心となる者が居た可能性があるが、整地面は他の建物跡より格段に広い訳ではなく、居住者に明瞭な階層差は見出せない。I期の建

物跡は柱穴の位置が不明瞭なため建物規模を復元することはほぼ不可能であるが、整地面の広さに著しい差がないことから、突出した規模の建物はなかったと推定できる。また、後続のⅡ期以降の建物跡の整地面とも大きな差はないことから、後述するⅡ期建物跡に近い規模の建物と類推してよいだろう。

### (3) Ⅱ期における集落の様相

Ⅱ期になると建物は調査区中央部から西部に建てられた。集落を構成する建物跡は、遺構分布から5つのグループに分けることができる（図2・3）。説明の都合上、北側から1群～5群の番号を付す。建物が複数纏まるようになることがこの時期の特徴である。各建物跡群の構成は次のとおりである。

1群：第15・16・30～35号建物跡で、製塩遺構に接して位置する。

2群：土手で区画された建物跡群。建物跡は北東－南西の方向である。これは風向を考慮してのことであろう。

3群：第6・16・21～25・36～38号建物跡の一群。

4群：第1～5号建物跡の一群。

5群：第7・8・9・10・11・12・26・27号建物跡の一群。

このうち、2群は上記のように建物の軸線方向がほぼ同じであり、防風用の土手を伴う計画的な建物配置が見て取れる。これに対し、1・3・4・5群は建物跡が纏まるが、2群のような整然とした建物配置ではなく、I期の散在した建物が集合したような形を呈している。

#### ①2群

はじめに2群の建物構成から確認していく。この区域は上下2つの面が確認されている。上層の第1次面が16世紀前半、下層の第2次面は15世紀末～16世紀初頭である。第1次面の建物跡は標高5m前後で検出されている。その下の第2次面との比高差は0.6mである。第2次面に比定される



建物跡は第49号建物跡で、その他に4つのピット群、11の整地面、112基の土坑がある。第1次面は前述のように北東-南西方向を軸線とする掘立柱建物があり、建物跡群の西側と北側に建物群と同じ方向の土手がある。土手を含めた遺構の範囲は、北西-南東方向が約50m、北東-南西方向は約60mとなる。第1次面は建物跡の位置は整然しており、これらは計画的に配置されることが分かる(図2)。第2次面は整地面と土坑が重複している上に、遺構の遺存状態が悪いこともあって建物群として捉えることが難しい。第49号建物跡やピット群の存在から、第2次面の時期に建物が存在したことが考えられる。第1次面に比べ、建物の範囲や配置が不明瞭であるが、おそらくは1・3・4・5群のように建物の整地面が複数あるような形態であり、後述する第1次面のような整然とした建物配置ではないと思われる。ただし、遺構の分布は第2次面の建物跡と重複する場所が密になっており、第1次面建物配置の原型が第2次面の段階で現れていた可能性がある。ここでは、建物跡群がある程度把握できる第1次面の建物配置を確認していく。

#### a. 第1次面の建物跡

第1次面で居住用と考えられる建物跡は第39・40・44・47号建物跡である。まずは、これらの建物跡の状況を見ていく。第39号建物跡は3間×1間(約65.6m<sup>2</sup>)である。南西部に炉を有する。これに直交する柱穴列(3間×1間)も第39号建物跡に伴うものとされている(財団法人茨城県教育財団 2007a)。そうすると平面形はL字状となり、この建物は曲屋ということになる(図5)。この張り出しにも炉がある。製塩に関連する耳金、骨角製筭、木製柄、小刀、土製の養子等が出土しており、製塩の傍ら刀装具の加工を行っていた可能性がある。

第39号建物跡の下層では第40号建物跡が確認されている。柱穴の並びは不明瞭であるが、黒色土が貼られており、建物が存在したことが分かる。同一箇所での建て替えから、一定期間居

住が継続していたことが分かる。

第44号建物跡(46.9m<sup>2</sup>)は中央よりやや北寄りに炉を有する。東側に3間×1間の第45号建物跡(21.7m<sup>2</sup>)がある。第45号建物跡は規模が小さいこと、第44号建物跡に隣接することから、これに付随する建物であったと考えられる。建物内部に炉、建物脇に粘土貼土坑<sup>8)</sup>がある。粘土貼土坑と建物が一体的なものとなれば第45号建物跡は作業用建物と言えるのではないだろうか。

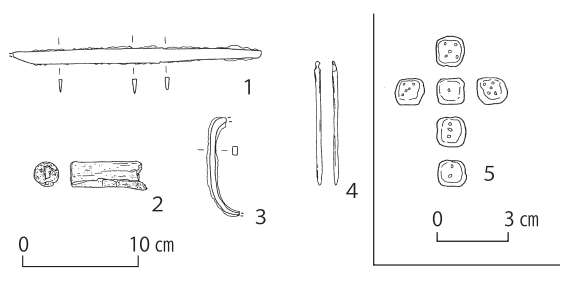
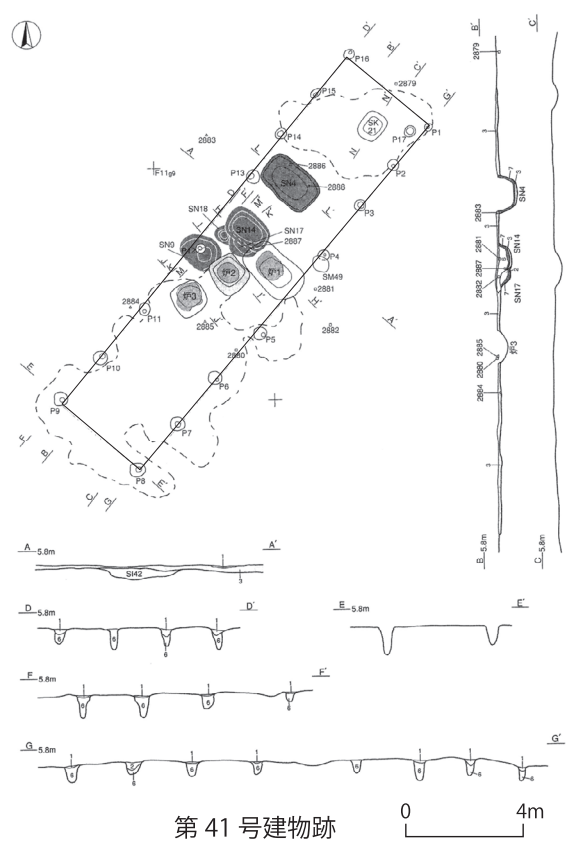
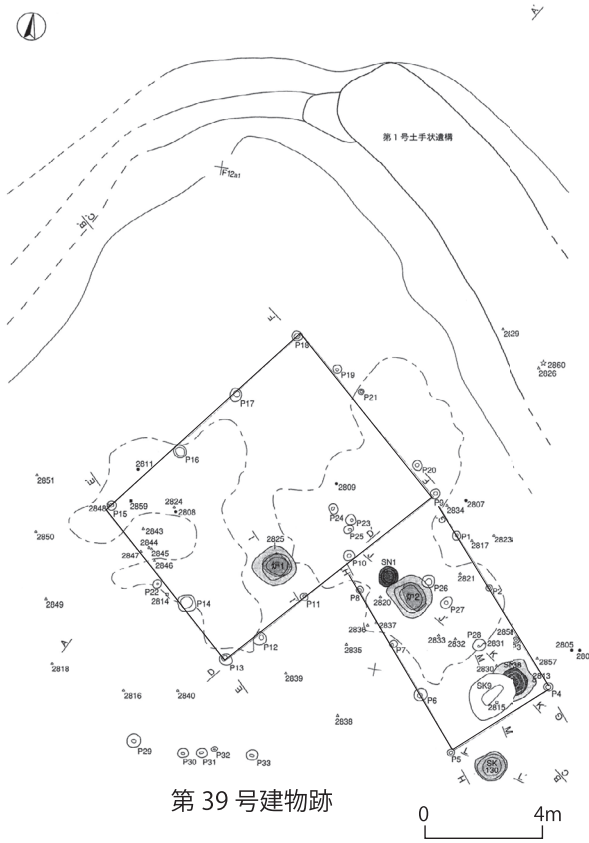
第47号建物跡も黒色土が12.4m×8.2mと広がり、3間×2間(29.4m<sup>2</sup>)と5間×2間(45.8m<sup>2</sup>)の重複した2つの柱穴列が認められる。この建物跡も規模からみて居住用であろう。西側に2間×2間の第48号建物跡(10.9m<sup>2</sup>)がある。小規模であることから、第47号建物跡の付属建物と考えてよいだろう。

以上の3箇所は居住用の主屋に附属建物に伴う、というあり方が見出せる。第39号建物跡は張り出し部分が付属建物に近い規模であり、曲屋の建物の場合、1棟のみで事足りたのであろう。このように、曲屋もしくは大小2棟の建物が、居住と作業場を構成した単位とみてよいだろう。

#### b. 作業場

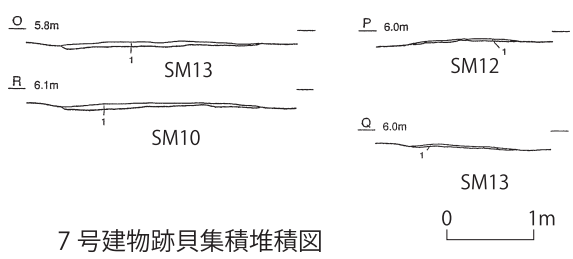
この他に作業用と推定されるものとして梁間が狭い第41・42号建物跡がある。この2棟は重複している。第42号建物跡が古く、この建物跡には炉3基がある。炉の1基では赤色に変色した砂岩と鉄滓が出土しており、鍛冶が推定されている。また、この上層で検出された第41号建物跡も建物跡中央部に炉跡3基があり、建物の平面形が北東-南西方向に細長い第42号建物跡と似た構造(図5)であることから、これも作業用建物と考えられ、この2棟のあった場所は作業場と捉えることができよう。

また、第44号建物跡西側10cm下で検出された第34号整地面(HK34)も作業場とされる。銅製や鹿角製の筭が出土しており、こうしたものの加工を行っていた可能性がある。



第39号建物跡出土遺物

- 1 小刀 2 木製柄 3 耳金 4 鹿角製斧 5 土製菓子



7号建物跡貝集積堆積図

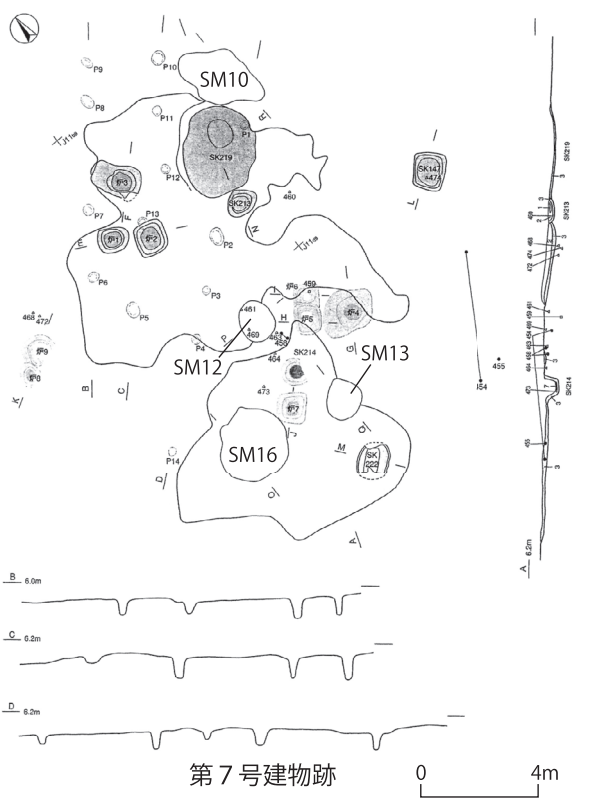


图5 第7・39・41号建物跡

## ②1群

この建物跡群は製塩遺構の西側に隣接する。北東－南西方向が約60m、北西－南東方向は約10mの範囲の建物跡群である。北東－南西方向に建物が並列していたと思われる。整地面での柱穴の位置から建物形態が明確なものはないが、整地面の広がりから建物は1棟であったと推定できる。

遺物の出土数が多いのは第15・30・31・32号建物跡で、かわらけと内耳土器等の土器類が破片数で150点以上出土している。この4棟は銭貨も多く出土しており、最多の第32号建物跡は51枚を数える。このうち、第15・32号建物跡は上下2面、第31号建物跡は3面の整地面があり、2～3回建て替えられている。遺物の出土が多いのはこうした長期間に亘って使用された建物跡である。1群では居住が長期間に及んだのは第15・31・32号建物跡であり、第30号建物跡も遺物の数量から一定期間の居住が推定される。一方、第16・33・34・35号建物跡は短期的であったと考えられる。

## ③3群

2群の南側に位置している。建物跡は北西－南東方向約40m、北東－南西方向約50mの範囲に分布している。第37号建物跡は上下2面の整地面があり、上面は建て替えに伴い造成したと考えられる。また、第21・22・23号建物跡の3棟は重複しており、長期間の居住が考えられる。最も新しい第21号建物跡は3間×1間である。この他に柱穴の配置から建物規模が分かるのは第6号建物跡で、2間×1間である。第6・21・37号建物跡で土器類等の遺物が多く出土している。

3群の範囲内では永楽通寶の枝銭が出土している。遺構に伴うものではないが、この区域で鑄造されていた可能性がある。第38号建物跡南側では畝が検出されている。小規模な畝であり、自給するに足りうるものではなく、外部から調達していた食糧を補完したものであろう。

## ④4群

3群の南側に位置する。建物跡は北西－南東方向約40m、北東－南西方向約30mの範囲に5棟が分布する。このうち、第2・4・5号建物跡で上下2面の整地面が確認されている。下面の整地面に5cm程度の黒色土を貼り付け新たな整地面を構築し、建物を建て替えている。整地面が1面のみ建物跡も炉が造り替えられており、一定期間の居住を考慮することができる。柱穴の並びが把握できる1号建物跡は整地面の広さが南北11m、東西9m、3間×1間であり、3号建物跡は2間×1間ないし3間×2間と推定される。他の建物跡も整地面の範囲から概ねこれに近い規模であり、3群は整地面の建物は1棟と考えられる。3群では第1・2・4・5号建物跡の4棟で銭貨が20枚以上と比較的多く出土しており、中でも第2号建物跡は99枚に及んでいる。

## ⑤5群

4群の南側に位置する。4群との間は約10mである。建物跡は北西－南東方向約50m、北東－南西方向約50mの範囲に分布している。4群も柱穴の並びが不明瞭なものが殆どであるが、第12号建物跡は2間×1間の柱穴の並びが見て取れる。第12号建物跡のあり方や、整地面の広がりを3群等と比べても差異はなく、おそらくは1棟であったと思われる。その中で第10号建物跡は曲屋の可能性が指摘されている（財団法人茨城県教育財団 2005）。第10号建物跡ではかわらけ、陶器、砥石、筭、毛拔、火打石、耳金等が出土している。耳金は製塩に関わる遺物であり、製塩従事者が暮らした建物と考えてよいだろう。この建物跡は上下2面の整地面がある。炉が4基検出され、一部は柱穴と位置が重複するものがあり、複数回の建て替えで炉の位置が替わっていったことが考えられる。第9号建物跡は第10号建物跡に付随する施設とされており（財団法人茨城県教育財団 2005）、2棟構成であったと考えられる。

第7号建物跡には4箇所の貝集積地がある（図5）。また、第8号・27号建物跡でも1箇所の貝集

積地が確認されている。いずれもウバガイが多い。

#### ⑥小結

2群の第1次面は建物跡の位置と土手の方向から計画的に建物を配置し、防風用の土手を構築している。その他の建物跡群は柱穴が明瞭な建物跡は少なく、柱穴から建物跡の平面形を確認することはできるものは僅かであるが、黒色土の整地面の分布をみると、2群の第1次面のような整然とした建物配置は想定し難い。2群の第1次面のあり方は次のⅢ期の建物跡群に類似しており、Ⅱ期のうちでも後半期にこうした建物群が出現したと考えられる。2群初期の第2次面は複数の整地面を伴う建物から構成されるもので、1・3・4・5群と似た様相であったのであろう。

#### (4) Ⅲ期における集落の様相

Ⅲ期の集落は調査区南部に移る。東西2つの建物跡群がある。西側の建物跡群を6群、東側の建物跡群を7群とする(図6)。Ⅲ期も製塩遺構の位置はⅡ期までと同じであり、6群、7群はそこから離れており、6群が約150m、7群は約200mの距離がある。6群、7群とも建物の軸線方向は北東-南西であり、2群第1次面と同じである。これも防風対策の措置と言えよう。さらに、7群では土手が築かれている点も2群第1次面と共通している。

#### ①6群

建物跡標高は3.3m～4.1mであり、Ⅱ期の建物跡に比べ低い。製塩遺構から離れても、風の影響が少なく比較的居住に適していた場所を選んだのであろう。

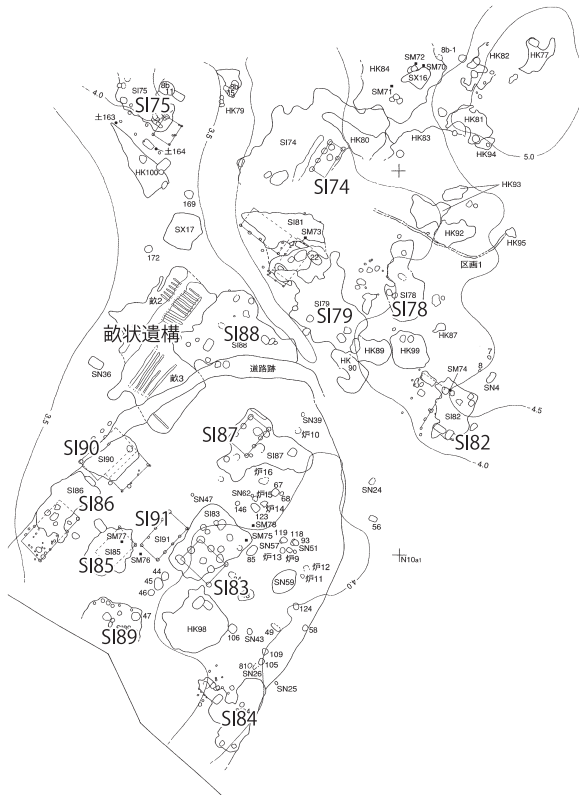
建物跡の広がりには北西-南東方向が約60m、北東-南西方向は約80mである。6群の整地面は上層の第1次面から下層の第3次面まで3面が確認されている。第3次面の時期は16世紀後葉である。検出された遺構の範囲は東西約30m、南北約25mで、その次の第2次面よりも遺構の分布は狭く、検出数も少ない。第2次面と第1次面の時間差はさほどなく、第2次面が16世紀末～17世紀初頭、

第1次面が17世紀前葉と考えられる。一定数の建物が建つのが第2次面の時期からである。この時期は複数の整地面がみられる。掘立柱建物跡や柱穴は南部に多い。第1次面の時期は建物跡、整地面の数が第2次面よりも多く、遺構の密度が増している。以上のように、6群の成立は16世紀後葉であるが、一定範囲に建物が建つのは16世紀末～17世紀初頭となる。

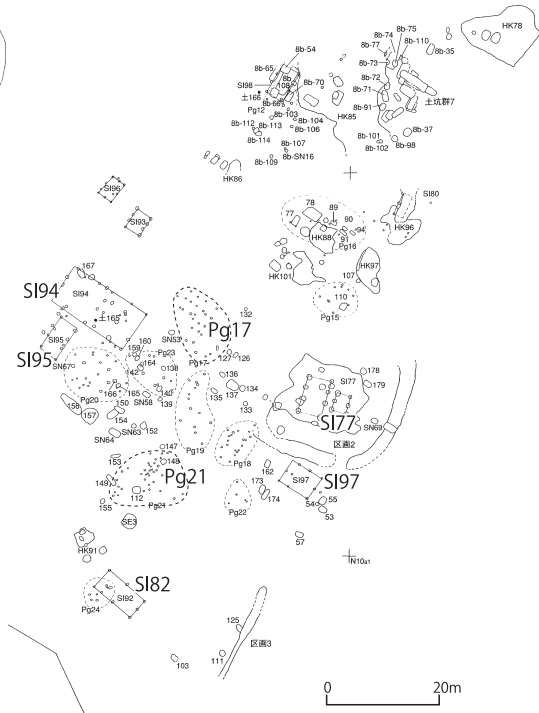
第2次面では第77号建物跡が3間×1間(27.1m<sup>2</sup>)と2間×1間(8.3m<sup>2</sup>)の2棟が並列する。第77号建物跡の西側から南側に複数のピット群、第94・95号建物跡、第97号建物跡等がある。第17号ピット群(Pg17)は柱穴状のピットが規則的に並び、これも掘立柱建物跡と考えられる。ピットの位置から北西-南東方向の建物跡1棟、北東-南西方向の建物跡1棟が推定される。この他にも、第21号ピット群(Pg21)もピットの広がる範囲から2棟の建物が推定される。第94・95号建物跡も北西-南東方向と北東-南西方向の2棟の組み合わせとみられる。第94号建物跡(4間×2間)が主屋である。こうした2棟で構成されるあり方はⅡ期2群第1次面と共通しており、居住及び作業場が一体となった構造を考えることができる。

一方、第93・96・97号建物跡や南端の第92号建物跡は作業小屋、倉庫の可能性が指摘されており(財団法人茨城県教育財団 2007a)、おそらく、そうした性格の建物とみてよいだろう。

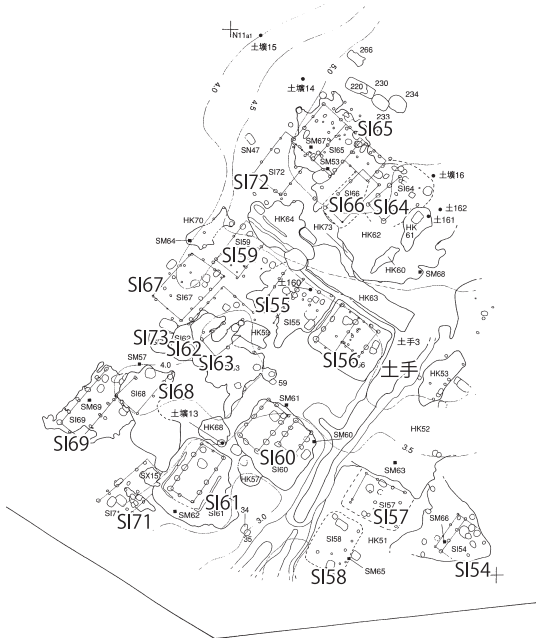
第1次面は建物の数が増え、整地面で柱穴が捉えられるものが第2次面より多い。このうち第83号建物跡は整地面南西部に3間×1間の建物跡(31.9m<sup>2</sup>)があり、整地面北東部に竈や炉、粘土貼土坑が設けられている。整地面南西部が居住用、北東部が作業場と推定される。瀬戸・美濃陶器、かわらけ、小刀、鎌、土錘、小札、骨角製筭、砥石、耳金等が出土している。陶器、かわらけは、建物跡と竈付近で出ており、日常用品と考えられる。金属製品や骨角製品、土錘は建物跡で出土している。耳金は製塩の従事を示すが、その他に、武具の加工や漁撈等にも携わっ



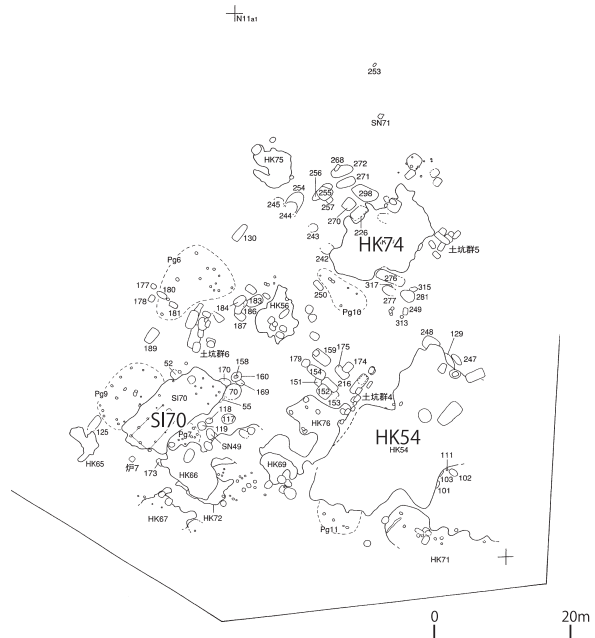
建物跡6群第1次面



建物跡6群第2次面



建物跡7群第1次面



建物跡7群第2次面

図6 建物跡6群・7群

ていたことが分かる。こうした生業については後述する。第87号建物跡も整地面西部に3間×1間(23.2m<sup>2</sup>)の建物跡、整地面東部に粘土貼土坑があり、第83号建物跡に似た状況が見て取れる。第88号建物跡は柱穴の配列が不明瞭であるが、整地面西部に建物跡が存在すると考えられる。建物跡の及ばない整地面東部に粘土貼土坑があり、第87号建物跡と類似性がある。整地面西側には畝があり、第88号建物跡に付随する耕作地とされる。

6群第1次面では、建物跡の柱穴が確認できるものは1棟のみのものが殆どで、第2次面のような建物が2棟で構成されるような組み合わせはみられない。整地面を建物よりも広く構築し、作業場にすると共に、居住用建物でも手工業的な作業が行われていたと思われる。

## ②7群

7群は6群と約40mの砂堤帯を挟んだ東側に位置する。建物跡の標高は3m～5.4mであるが、3棟を除くと3m～4.2mの範囲に収まる。標高は6群とほぼ同じであり、低位で風の影響が比較的少ない場所を選んだものと思われる。建物跡の広がりには北西-南東方向が約60m、北東-南西方向は約60mである。上下2面で建物跡が検出されている。下層の第2次面が16世紀後半～17世紀前葉、上層の第1次面が17世紀前半である。

第2次面で柱穴列が確認されたのは第70号建物跡であるが、その他に整地面、ピット群が複数あり、幾つかの建物が存在したことが推定される。

第70号建物跡は4間×2間(22.1m<sup>2</sup>)で、整地面北部にも柱穴状のピット数基がみられ、おそらくは2棟から成っていたと考えられる。この他に建物跡の可能性のあるのは第54号整地面(HK54)、第74号整地面(HK74)である。第54号整地面では人物の刻印された硯、第74号整地面においては土製の面が出土している(図7)。土製の面は神楽との関係が示唆されている(茨城県立歴史館 2012)。こうした遺物から居住用に整地された場所と考えてよいだろう。

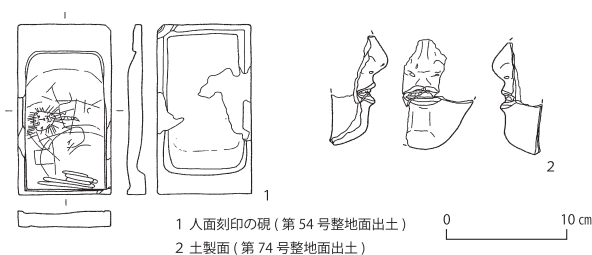


図7 第54・74号整地面出土遺物

第1次面では土手が築かれる。土手はL字状で、それに区画された複数の建物跡が並ぶ。また、土手の北側と西側でも、建物跡が検出されている。

### a. 土手で区画された内側の建物跡

建物跡・整地面の分布から次のように区分した。①第55号建物跡、②第56号建物跡、③第67号建物跡、④第63・62・73号建物跡<sup>9)</sup>、⑤第60号建物跡、⑥第68・69号建物跡(第68・69号建物跡は整地面が重複しており第69号建物跡が先行する)、⑦第61号建物跡、⑧第71号建物跡。このように、少なくとも①～⑧の単位を抽出することが可能である。建物数は1棟または2棟構成であった。2棟1組の場合は建物跡が並列している。2棟で構成されるものは第55号建物跡、第60号建物跡、第67号建物跡である。第56号建物跡は3間×1間に2間×1間の張り出しが付くもので曲屋と考えられる。この曲屋は2棟で構成された建物と同程度の空間を保持したものと捉えられ、2棟構成のあり方に近い。第55号建物跡は付属建物に炉が2基あり、粘土貼土坑が南側に隣接する。付属建物は作業場と考えられる。1棟建物のうち、第63号建物跡は建物外の整地面東部に炉があり、野外における整地面での作業場が推定される。

以上の建物跡・整地面は密集し、建物の位置は粗密があまりなく、建物の位置は整然としている。計画的な建物配置が見て取れる。建物跡の整地面が土手に沿って並んでおり、土手の位置を基に建物位置が決められた可能性がある。

### b. 土手東側の建物跡

土手沿いに第57・58号建物跡が並ぶ。土手の位置を基に建物位置が決められたことが窺える。

東側には第54号建物跡がある。これらは1棟単独の単位である。

#### c. 土手北側の建物跡

第64・65・66・72号建物跡があり、第65・66・72号の3棟は重複している。新旧関係は第66号と第72号が第65号建物跡より新しい。第66号建物跡は第64号建物跡と同一方向であり、この2棟は同時期で1つの居住単位を構成していた可能性がある。第65号建物跡は3間×3間に2間×2間の張り出しが付き、土手内側の第56号建物跡に類似する。第72号建物跡は1棟単独であった。

以上のように7群第1次面の建物跡は、①2棟から成るもの、②1棟で張り出しが付く曲屋で規模は2棟で構成されるのと同程度のもの、③1棟単独の3つのあり方が確認できた。②の張り出しが付くものはⅡ期2群第1次面の曲屋建物と形態が類似している。

#### (5) 土器、陶磁器の出土状況

中世から近世の土器及び陶磁器は15世紀後半～17世紀前半に収まる。その約94%が土師質土器で、かわらけが多く、その他に内耳土器、火鉢、香炉等がある。陶磁器は、舶載磁器は僅かであり、少数の肥前を除くと大半は瀬戸・美濃陶器である。器種は皿類が多く、天目碗もみられる。

中世常陸では在地系の土師質土器が多く、村松白根遺跡もこれと同様の状況が看取される。日常の食膳、調理具は在地系土器で賄われていたことが考えられる。この遺跡は真崎浦における水上交通との関わりも示唆され、陶磁器は物流の所産ともされる。そうした証左として瀬戸・美濃の未使用とされる卸目付大皿があり、商品として搬入されたものであろう。

土器、陶磁器とも建物跡、整地面での出土数が多く、集落での消費財と考えられる。かわらけは、油煤が付着したものが含まれることから日常雑器と思われる。内耳土器等の在地系土器も常陸で生産されたものであるが、これらも陶磁器同様に物流の所産と考えられる。

#### (6) 集落の特徴

以上、Ⅰ期からⅢ期の建物跡群について確認してきた。これら建物跡群は製塩に携わる集団が居住した集落と考えられる。Ⅰ期からⅢ期の様相から、集落の特徴について要約すると以下の諸点が指摘できる。

①建物は黒色土の整地した上に建てられている。砂地という地形環境のため、黒色土には貝殻も混ぜられ、硬く締めた地盤補強をしている。

②Ⅰ期～Ⅲ期の各時期、建物跡の位置が北から南へと移り居住地が変わっている。

③Ⅰ期は建物数が少なく、製塩遺構も少数に留まることから、当初は宅地が分散的であった。Ⅱ期以降、建物は比較的近場に集まり、5つの群として捉えられる。建物数の増加に比例して製塩遺構も増えている。建物、製塩遺構の増加は集落居住者、即ち製塩に従事する者が増えたことに起因していよう。Ⅱ期の各建物跡群は、凡そ40m～50m四方の範囲に建物が集まったものである。建物跡群は製塩遺構の西側に位置し、製塩が行われた場所と居住地が明確に分かれていた。その中で1群は製塩遺構に隣接していること、Ⅰ期の建物跡に近い北寄りに位置することを勘案すると、Ⅱ期当初建物は1群で、その後2群第2次面、3群、4群、5群が成立したことが考えられる。

④Ⅱ期2群第1次面建物跡は、方向が揃い建物が計画的に配置されたことが看取される。建物跡群には防風用の土手が伴う。土手の方向も建物に合致しており、これらが一体的に造られたことが窺える。土手は一義的には防風対策であろうが、建物を規則的に配置するための区画的性格をも兼ねていた可能性も考慮できる。この建物跡群はⅡ期後半に出現しており、集落はこの時期になって建物が同一方向に並んだ形態へと変化した。上記③で指摘したことも踏まえると、Ⅱ期の建物変遷は1群→2群第2次面、3群、4群、5群→2群第1次面と言えそうである。1群は建物跡の重複から2群第2次面、3群、4群、5群が

成立した時期まで継続していたと考えられる。また、3群と5群は建物跡が重複しており、2群第1次面の時期まで存続していた可能性がある。

⑤Ⅱ期2群第1次面では、主屋と付属建物の2棟から成るもの、あるいは主屋と付属建物が合わさった曲屋が、集団を構成した単位としての家<sup>10</sup>であったと考えられる。このようなあり方はⅢ期の建物跡6群と7群においてもみられ、Ⅱ期後半にこうした集落形態へと変化し、それが居住地の場所を移動させたⅢ期も継承する。Ⅲ期の建物はⅡ期以来の曲屋に加え、7群では2棟が並列する形が出現する。一方で、1棟単独のケースもⅢ期まで続いた。5群第83号建物跡の事例は1棟の建物が居住と作業を兼ね、さらに建物を建てない区域まで整地面を広げ、作業空間を確保したものであった。

⑥Ⅲ期の建物跡群は東西の2個所に分かれる。この段階になってⅡ期までの複数の集団が2つの組織に再編成されたことが推論できる。

⑦出土遺物はかわらけ、内耳土器が多い。これに比べると陶磁器類は数量としては少ないが、瀬戸・美濃の皿は定量出土しており、日常的な使用が考えられる。また、天目碗も出土しており、趣向的な品と捉えられる。また、賽子のような遊戯に関わるものもみられ、日常生活の余暇を垣間見ることができる。

⑧銭貨の多く出土している建物跡が複数あり、集落内に相当数の銭貨が流入していたことを示している。おそらくは塩を媒介とした経済的所産と考えられ、塩は商品として搬出されていた可能性がある。銭貨の出土数が比較的多い建物跡では陶磁器、土器類が多い傾向があり、これらも物流によって搬入されたものと言える。

## 2.2 生業

### (1) 製塩

製塩遺構は黒色土の整地面に建てられた釜屋とその屋内の竈、鹹水槽、屋外の鹹水槽から成り、一部土樋を伴うものがある。製塩遺構は海岸側

の調査区東部に集中する(図3)。製塩遺構は海岸に近い砂丘上にあつて、海水の満潮時でも水没しない場所に釜屋が設けられたことが分かる。調査対象地外の東側の海岸近くに揚浜の塩田が存在したと思われる。海岸に近い場所に釜屋を設けることが効率的で、塩田に連なる一体的な製塩が可能であった。濃度を濃くした海水(鹹水)を煮詰めるには土釜を用いたと考えられており(財団法人茨城県教育財団 2005)、土釜の部材であった耳金、吊金具が出土している。土釜には粘土と粉碎した貝殻を混ぜて構築したようである。廣山堯道氏は近世に貝殻粉の土釜が確認できるが、中世に遡る可能性を指摘しており(廣山 1983)、村松白根遺跡や後述する沢田遺跡、長砂渚遺跡はそれが確認できた事例と言える<sup>11</sup>。鹹水槽は粘土が貼られ、塩水が砂層にしみ出す漏水防止を意図している。竈、鹹水槽が2～4回造り変えられている製塩遺構が多く、ある程度の期間操業が続けられていたことが分かる。検出された製塩遺構は21の纏まりに区分される<sup>12</sup>。東西50m、南北160mの範囲に分布する。製塩遺構群は集落よりも海に近い東側にあり、南北に長いことから、海岸線に沿った砂丘上に製塩遺構群が細長く形成されたことになる。釜屋は北東-南西方向に配置された様相が見て取れ、建物と同様に北東からの風向きを考慮したことが窺える。これらは標高5m～9.7mで検出されている。下層から上層にかけて複数の釜屋が重複している箇所がある。黒色土層の間には砂層が挟まれており、数度の構築が繰り返された。製塩遺構の分布と標高から、幾つかにグループングすることができる(図3)。北端部の第11・12・19・20号製塩遺構群は重複しており、標高から20号製塩遺構群→19号製塩遺構群→12号製塩遺構群→11号製塩遺構群の順に新しくなっていく(これを製塩遺構群グループaとする)。これらは標高7mから9.4mの間で推移していく(図8)。図8は1つの点が製塩遺構群であり、縦軸に標高、横軸で製塩遺構群の数を表示した。製塩



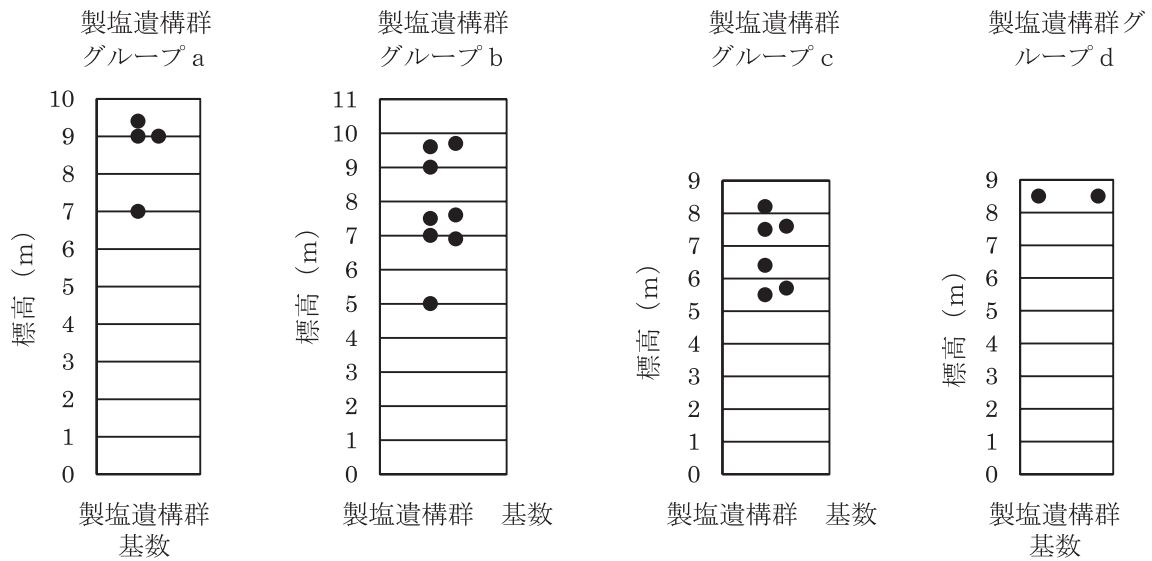


図8 各製塩遺構群グループ標高

遺構群グループa南側では第9・13・17号製塩遺構群、第10・15・16・18・21号製塩遺構群が重複している。新旧関係は21号製塩遺構群→15号製塩遺構群→18号製塩遺構群→16号製塩遺構群→10号製塩遺構群という変遷と、もう1つは17号製塩遺構群→13号製塩遺構群→9号製塩遺構群と推移している。前者は標高5mから9.6m、後者は7.5mから9.7mへと順次高くなっていく。両者は東西で近接するが、18号製塩遺構群が標高7.6mと17号製塩遺構群に近い高さであり、最初釜屋1棟であったものが、途中から近接して2棟建てられたことになる（この2つを合わせて製塩遺構群グループbとする）。製塩遺構群グループbの南側には第4・5・6・7・8・14号製塩遺構群の一群がある（製塩遺構群グループc）。このグループの中で4号製塩遺構群は標高5.5m、14号製塩遺構群は5.7mで検出された初期の製塩遺構群である。標高で見ると、標高6.4mの7号製塩遺構群がその次の段階、6号製塩遺構群は標高7.5m、8号は標高7.6mでほぼ同時期と考えられる。最も高い5号製塩遺構群跡は標高8.2mである。このように製塩遺構群グループcは4・14号製塩遺構群→7号製塩遺構群→6・8号製塩遺構群→5号製塩遺構群の変遷が考えられる。南部に位置する第1・2号製塩遺構群（製塩遺構群グループd）は標高8.4m、

8.5mでほぼ同じ頃に操業されていたようである。また、Ⅱ期の集落建物跡5群の範囲で第3号製塩遺構群が検出されている。この製塩遺構群のみ内陸側の西寄りに位置する。

初期の製塩遺構群は標高5m台であり、最終期は標高8～9mとなる。初期に造られたのは製塩遺構群グループb・cであり、ほぼ最終期まで続いた。製塩遺構群グループbの第21号製塩遺構群、製塩遺構群グループcの第4・14号製塩遺構群は最古期であり、集落のⅠ期に比定できる。製塩遺構群グループaは、製塩遺構群グループcの北側に形成され、製塩が拡大したことが窺える。製塩遺構群グループbもこの時期に西側で第17号製塩遺構群が出現し釜屋が増えている。製塩遺構群グループaと製塩遺構群グループb西側の釜屋は標高7mで出現しており、ほぼ同じ頃に釜屋が造られたことになる。これらは、Ⅰ期の製塩遺構群の標高より高く、Ⅱ期に比定してよいだろう。集落内部でも3号製塩遺構群が造られたのがⅡ期である。3号製塩遺構群は鹹水槽が一度造り変えられているが、その後続く製塩遺構はなく、Ⅱ期のうちに終息している。3号製塩遺構群は塩の増産を意図したことが考えられるが、塩田から離れた製塩に不向きな場所であったため、後続する釜屋が造られなかったのであろう。

以上のように、Ⅱ期に製塩の生産量が增大したと考えられる。製塩遺構群グループdは標高8m台であり、最も遅い時期に造られた。各グループの釜屋は製塩遺構群グループaが1棟、製塩遺構群グループbは当初1棟であったものが途中から2棟構成となった。製塩遺構群グループcは1棟単独と2棟の組み合わせが交互になっている。製塩遺構群グループdの時期は、集落のⅢ期に相当すると考えられる。この時期の集落は南方に移動するが、さらに製塩遺構群グループdを造ることで塩の増産が図られたと思われる。

製塩遺構群の分布から概ね4つのグループを抽出できたが、釜屋の数から、おそらくはそれぞれが複数の人々が共同して操業したことが推測される。Ⅱ期に製塩遺構群グループa、製塩遺構群グループb西側（第17号製塩遺構群）、3号製塩遺構群、Ⅲ期に製塩遺構群グループdが出現するのは操業する集団が増えたことを意味し、集落の建物群の増加と相関関係にあったと言える。揚浜での製塩は海水の汲み上げに相当の労働力を必要とした。そのため、生産規模拡大には従事者を増やすことは不可欠であり、製塩の釜屋増加と集落の規模拡大は関連した事象と理解できる。

製塩が行われていた場所は一貫して東寄り海岸に最も近い砂丘上であった。集落が時期によって場所を移動させているのに対し、製塩遺構は時期が下るに従い範囲が拡大するが、当初以来の場を維持していた。砂に埋もれた場所に新たに整地面を造成し釜屋、屋外鹹水槽の構築を繰り返したのは、海岸近くに存在したと推定される塩田に連なり、製塩に適していたからであろう。内陸側で3号製塩遺構群が造られたものの、その後継続しなかったのも、塩田のある浜から離れていて製塩には不向きであったためで、このことから製塩の適地が海岸に近い砂丘であったことを考えることができる。

## (2) 集落内における生業の様相

村松白根遺跡では、集落の建物跡において漁撈、鍛冶、農業に関わる遺物が出土しており、居住と作業を兼ねた場と捉えられる。集落内で複数の生業が行われていたことが窺える。漁撈関係では、釣針や土錘が出土しているが、数は少ない。土錘は小型であることから、刺網による小規模な網漁であったと考えられる。太平洋は砂浜でかつ波が高く、小型土錘の網漁には向いてない。おそらくは村松白根遺跡西方にあった潟湖の真崎浦や、太平洋と真崎浦の間を流れる新川（村松白根遺跡南方）での漁撈ではなかろうか。また、貝の集積地が複数あって食用の貝を採取していたと考えられる。海水、汽水、淡水の貝が認められ、太平洋と真崎浦や新川での採取が推定される。中でも、ウバガイが多い。村松白根遺跡では貝の集積が78箇所確認されているが、その大半でウバガイの占める割合が多い。採取された貝殻は砕かれて土釜の構築材にされてもいる。貝は食用だけでなく、貝殻を鹹水槽壁面に防水用の漆喰として用いていたようであり、製塩遺構で漆喰の塊が出土している。貝の集積地では貝殻が粉碎されている所もあり、それらは漆喰の用材と考えられる。貝殻が遺存していたものは食用とみてよいだろう。

Ⅱ期やⅢ期には建物跡に近接して黒色土の整地面で畝が2箇所検出されている。小規模な畝跡と考えられる。土壌の花粉分析では麦等の花粉が認められたが、黒色土の搬入先のものなのか、この地での栽培種なのかは判明していない。栽培種は不確定ながらも、何等かの耕作がなされていたことは明らかである。畝の広さからみて、自家消費分の栽培であろう。農具としては鎌が出土している。

小札、切羽、小柄、栗型、鉏、鏝、縁、筭、短刀が出土しており、武具類や刀装具の製作が行われていたことも考えられる。筭は骨角製のものが幾つかみられ、鹿角の加工途中の未成品も出土していることから、鹿角の加工を考える

ことができる。鹿角の未成品はI期の第18号建物跡でみられ、集落初期の15世紀後半の段階から既に製塩以外の生産活動が行われていたことが窺える。刀装具は複数の建物跡で出土しており、これらの加工が集落内で恒常的に行われていた可能性がある。刀装具の中には金属製品があり、金属加工の可能性も考えられよう。また、大工道具類である片刃、釘、鉋等が出ており、これら道具類は生業に関わる様々な加工に用いられていたと思われる。

次に、幾つかの建物跡から集落内の生業を考えてみる。

#### ①第83号建物跡（17世紀前半）にみる複数生業

第83号建物跡はⅢ期の建物跡である（図8）。上下2つの整地面がある。第1次面で南部に3間×2間の掘立柱建物跡があり、北部では第1次面で竈1基、第2次面で炉2基が検出されており、ここが作業場とされる。

遺物は南部の掘立柱建物の範囲で多く出土している。生活用具である瀬戸・美濃陶器、かわらけ等の土器類、鉄鍋、包丁、火打石に加え、土錘、耳金、吊金具といった生業関連遺物がみられる。小札、小刀、鐮が出土しており、こうした武具類、刀装具が製作されていたことが推定される。鎌のような農具も出土している。耳金、吊金具は製塩関係する遺物である。北部では貝集積地があり、ウバガイを主体とし、ハマグリ、カキといった海水、タニシのような淡水貝がみられる。住人の食用として採取してきたものであろう。集落付近の海岸、新川や真崎浦の河川・湖沼での採取を考慮することができる。このように、第83号建物跡では、武具生産、漁撈等の生業が窺え、複数の生業をこの建物跡から考えることができる。

#### ②第50号建物跡と第42号建物跡の鍛冶（16世紀前半）

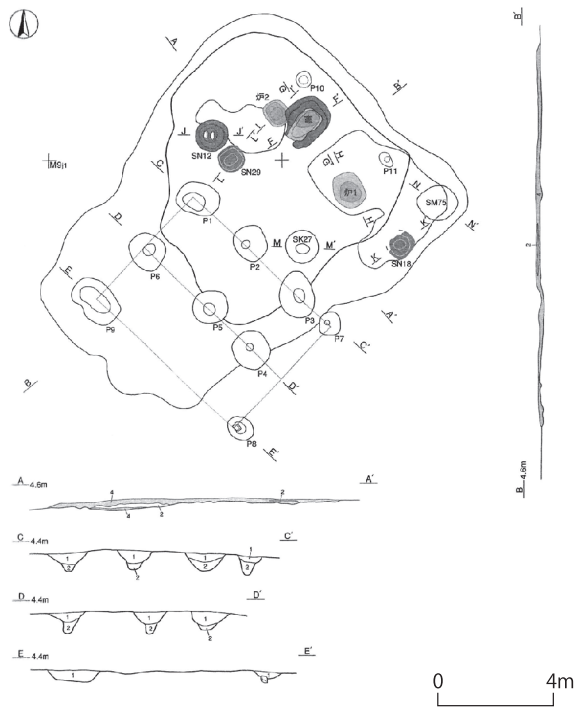
2棟ともにⅡ期の建物跡である。第50号建物跡は黒色土の整地面（厚さ4～8cm）が不整形にみられる（図9）。柱穴が列状にあるが、建物跡

を推定できるだけの数は検出されていない。この整地面で0.6m×0.4mの楕円形状の炉跡が確認されている。炉跡内には焼砂が充満していた。砂中には溶解した鉄分が含まれる。炉の南側では鍛造剥片が炉跡南側で比較的多く出土している。このような遺構と遺物の検出状況から鍛冶作業小屋と認識されており（財団法人茨城県教育財団 2007a）、鍛冶に関わる建物とみてよいだろう。柱穴の正確な並びは不明ながらも、炉は覆屋を伴うと考えられる。第42号建物跡も2.1(3)の建物跡2群で触れたように鍛冶の可能性が考えられる。

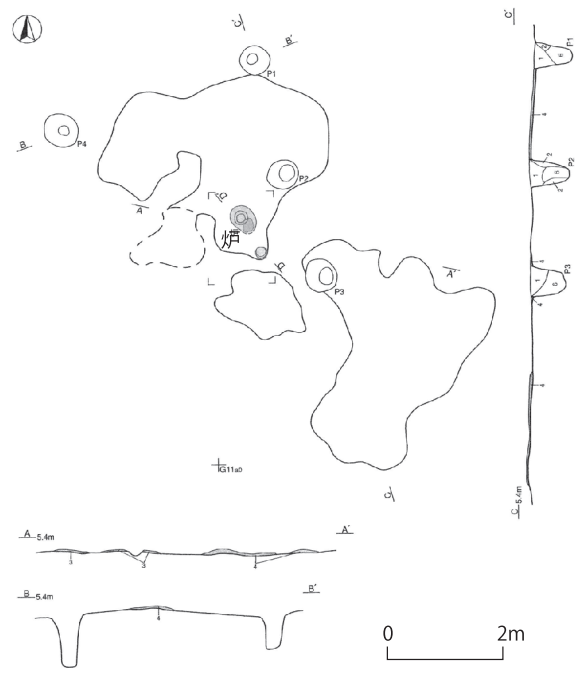
#### (3) 複数の生業

以上のように、村松白根遺跡では製塩を主体的に行っていたが、集落内では骨角製品の加工、鍛冶、畠作等が行われ、集落近辺の河川湖沼での漁撈も考えられる。骨角製品の加工は筭が目立ち、鹿角の加工途中のものも出土していることを踏まえると、加工が行われていたのは確実である。筭は完形品が幾つかみられた。小札や刀装具等の出土から武具生産を行っていた可能性が高く、骨角製品の加工や鍛冶はそれに関係していたと考えてよいだろう。海村の生業は複数が確認されているが（春田 2010）、村松白根遺跡ではこれと似た状況を指摘できる。

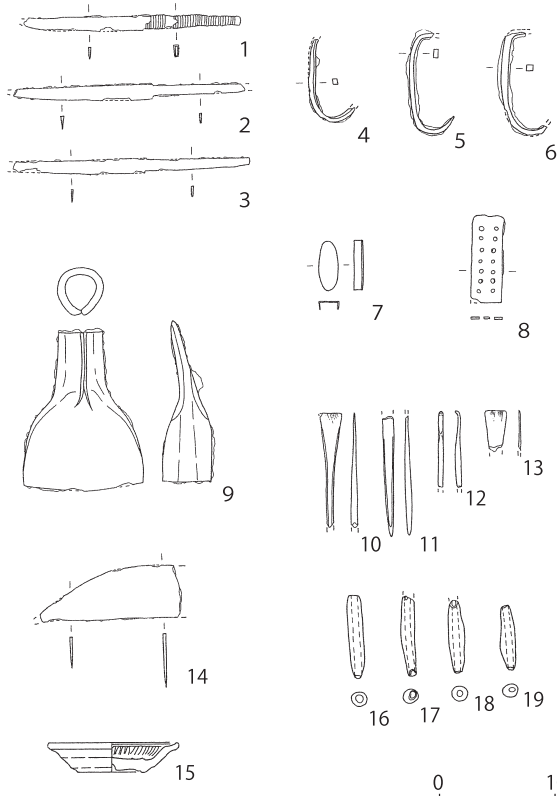
小野正敏氏は村松白根遺跡を海の資源を活かしつつ複数の業種が合わさった技術集団型の生産の場とみており（小野 2010）、鍛冶や武具生産といった海洋資源に留まらない多様な生業を含んだあり方は、小野氏の言う「異業種の協業集団」そのものである。さらに、第83号建物跡のような1つの建物における複数の生業は、生産者が異なるというよりは、特定の技術に特化しない様々な生産を行った者が存在した可能性も考慮される。一方で、第50号建物跡や第42号建物跡のように鍛冶専門の場もあり、1つの技術に特化した者も想定され、個々人の有する技術もまた多様であったと言えよう。



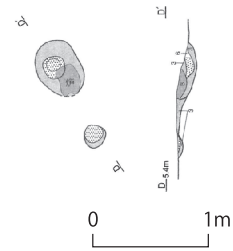
第 83 号建物跡



第 50 号建物跡



第 83 号建物跡出土遺物



第 50 号建物跡炉

- 1・2・3 小刀 4 吊金具 5・6 耳金  
 7 鐺 8 小札 9 鉞 10・11・12・13 筭  
 14 鎌 15 瀬戸・美濃皿 16・17・18・19 土錘

図 9 第 50・83 号建物跡

## 2.3 埋葬地

土壙墓166基が調査区北部から中央部において検出されている。これらは集落居住者が埋葬されたものとみてよい。土壙墓の形状はいずれも楕円形を呈する。出土した人骨は185体を数えるが、墓壙を伴わないものもある。砂地で強風により掘り込みが喪失したのであろう。これらは土葬で、埋葬形態が判明しているものは屈葬67%、伸展葬2%、頭位が北34%、北東37%である。土壙墓は幾つかの纏まりがみられ、分布状況からa～i群の9つに区分した(図10)。このうち、北部のa・b群がI期の建物跡と、中央部のc・d群がII期建物跡1群と、e・f・g群がII期建物跡2群と範囲が重なる。また、h群は製塩遺構と重複する。i群はII期建物跡2群と製塩遺構の間に位置する。

### (1) 土壙墓の時期

土壙墓は時期を特定できる副葬品が少なく、建物跡群や製塩遺構と範囲が重なる土壙墓群について、標高を比較することで時期差があるのか、あるいは同時期と捉えられるのか、その点を考えてみたい(図11)<sup>13)</sup>。

調査区北端部のa群は第14号建物跡付近で検出されており、これに先行する。b群は一部を除くと概ね標高3m～4.4mであり、建物跡よりも下層にある<sup>14)</sup>。したがって、b群もまた建物に先行するようである。この仮定に基づけば、I期の建物跡は調査区外の東・西側に存在したことが推定され、検出されたI期建物跡よりもやや先行する建物があって、a群とb群はそれに関わる埋葬遺構の可能性はある。

土壙墓c群とd群はII期建物跡1群と重複する。土壙墓c群は標高3.6m～5.5m、土壙墓d群が3.9m～5.5mであり、II期建物跡1群は標高4.5m付近の2棟以外は5.6m～6.1mで、建物跡に比べ土壙墓の標高が低く、土壙墓が先行すると考えられる。c群の土壙墓が約2mの標高差があり、ある程度の期間埋葬が行われていたことが読み取れ

る。一方、d群は標高5m前後に集中しており、ある時期に埋葬が集中したようである。c群とd群は建物跡1群よりも古いことから、埋葬時期はI期の可能性がある。

II期建物跡2群の土手と重なるf群は標高3.1m～4mであり、II期建物跡2群が標高4.3m以上であることから、土手構築以前の墓と考えられ、II期建物跡2群第1次面までは下らない。g群は標高3.4m～5.2m、e群は1基を除くと標高3.8m～4.9mで、II期建物跡2群のうち、検出面の標高が低い建物とはほぼ同じ高さとなる。報告書(財団法人茨城県教育財団 2007a)では居住地と埋葬地が隣接したとしている。II期建物跡2群の居住者の埋葬地と考えられる。e群とg群の標高はほぼ同じに推移しており、埋葬時期は並行していたと思われる。この2つの土壙墓群は標高5m前後でほぼ終息している。一方、建物跡2群東側にあるi群は標高5m付近より埋葬が開始されており、その時期はe・g群の終末頃と考えられる。上層の土壙墓は標高9m近くであり、III期まで継続していたとみられる。製塩遺構と重複するh群は標高8.4m～10.2mで、h群が分布する区域の製塩遺構が使用されなくなった後のIII期の墓である。

以上のように、埋葬地は時期によって場所が異なることが明らかとなった。標高及び建物跡群との比較から、各土壙墓群の時期変遷を整理するとa・b群→c・d群→f群→e・g群→i群→h群となる。

a・b群はI期の建物跡にやや先行し、c・d群がII期建物跡よりも古く、a～d群は大枠でI期に比定できる。f群はII期建物跡2群第2次面以前であり、II期の前半と捉えられる。e群とg群はII期建物跡群と並行し、i群は標高5mから造墓が開始され、これらもII期に比定される。i群はIII期まで下りh群と並行する時期がある。集落が南部に移るIII期も埋葬地は調査区中央部にあって、集落とは離れた。

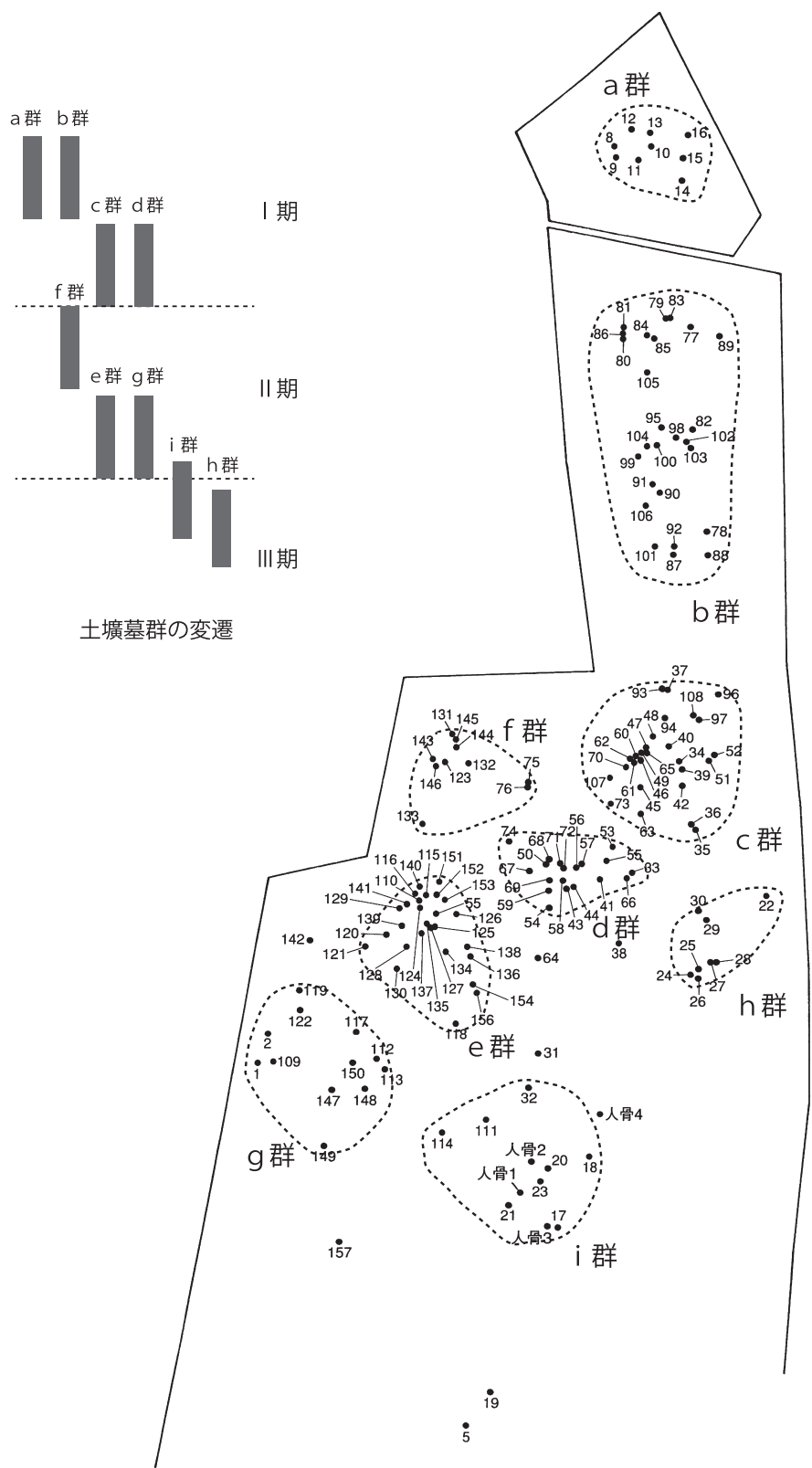


図 10 土墳墓群の位置と変遷

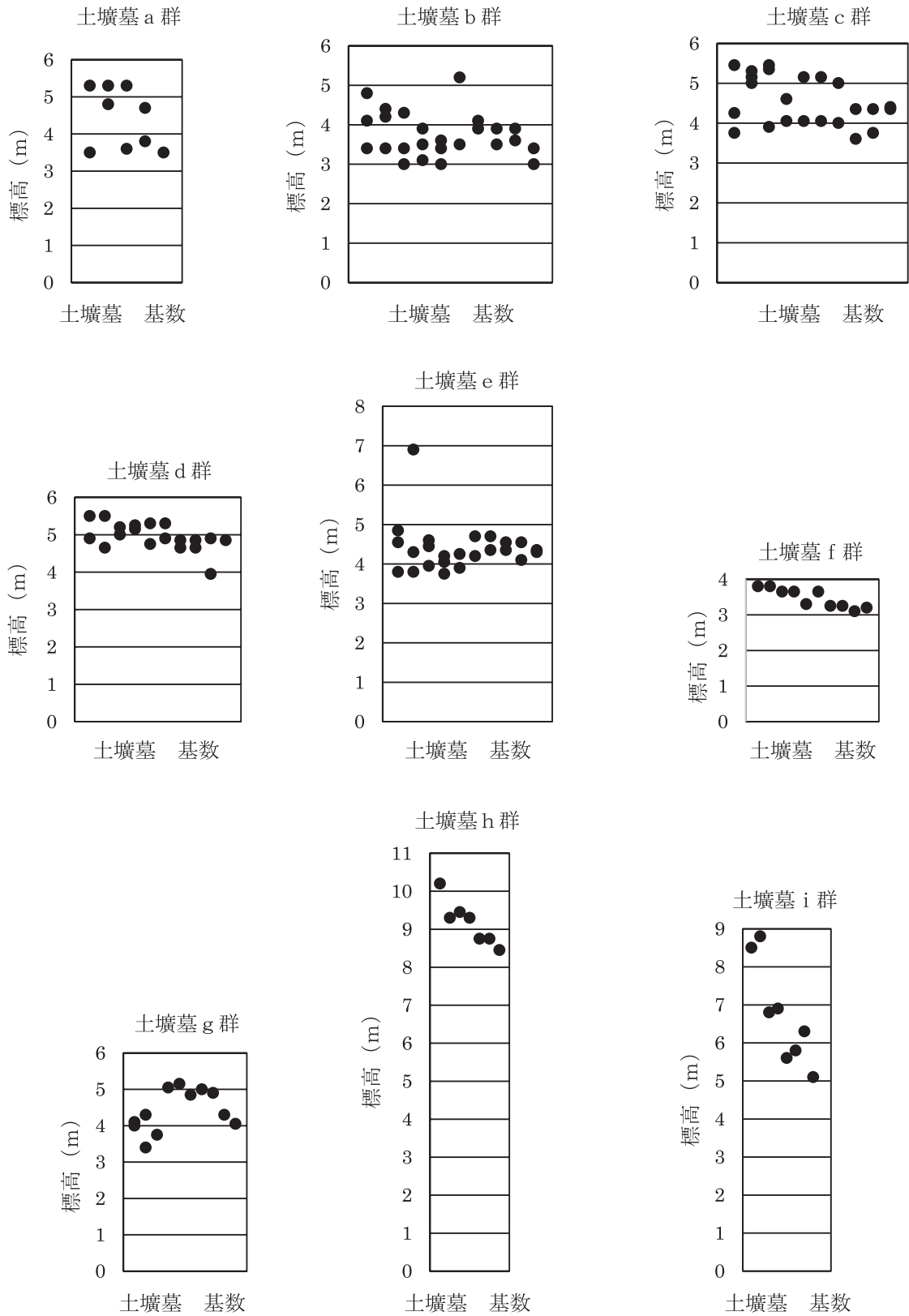


図 11 各土壙墓群標高

(2) 人骨分析から推定される血縁の系譜

村松白根遺跡では出土人骨について古ミトコンドリアDNA分析が実施されている。それを基に血縁の系譜を考えてみたい。古ミトコンドリアDNA分析では22のハプロタイプが抽出されている(坂平 2007)。ハプロタイプは母系の血縁のみしか分からないが、多くの母系が見出されており複数の家族の存在が想定される。人骨分析(西本 2007)によるとハプロタイプ10・16が血縁関係の可能性(表1・2)<sup>15)</sup>。

ハプロタイプ10の第59・66・72号土壙墓は土壙墓群d群にある。被葬者はいずれも40歳以上の男性で、検出された標高が4.65m～5mであった。先に集落を要約した2.1 (5) ⑤で単婚家族を推定したが、被葬者の年齢を考えるとそれぞれが別家族との解釈ができる。なお、第66号土壙墓は60歳以上とされており、第59・72号土壙墓の被葬者が40歳代であったとすれば、いずれかの被葬者との親子関係も考慮しうる。詳細な年齢までは明らかにされていないので、これ以上の追究は難しいが、単婚家族を前提に捉えれば、製塩に従事して集落に暮らした家族は複数で

あったことを示唆するものであろう。d群はI期建物跡群にほぼ並行することが考えられ、I期の段階において同一血縁の家族が複数存在していた可能性がある。

ハプロタイプ16では、第131・140・141号土壙墓がe群に所在する。3体の年齢は20～39歳、13～14歳、3歳前後とされる。おそらくは同一家族であろう。検出標高が4m～4.2mであり、埋葬された時期は近かったと考えられる。ハプロタイプ16は土壙墓c群の第51号土壙墓、d群の第58号土壙墓、f群の第133号土壙墓、h群の第30号土壙墓も該当する。前節で示した土壙墓群の時間的推移から、c群、d群がI期と考えられ、f群、e群がII期、h群がIII期に相当することから、この血縁はI期頃に村松白根遺跡の集落に暮らしたことが確認でき、III期まで血筋が継承したことが分かる。このことは、集落初期のI期に住み始めたハプロタイプ16の血縁者が集落最終期まで全期間に亘りこの地で生活を続けていたことを意味している。集落の場所が移動しても初期入植者の子孫がそのまま居住したことをも示している。ハプロタイプ10は第59・66・72号土

表1 ハプロタイプ10

土壙墓	土壙墓群	標高	年齢	性別	時期
105	b	3.1m	60歳以上	男	I期
59	d	4.65m	40～59歳	男	I期
66	d	5m	60歳以上	男	I期
72	d	4.65m	40歳以上	男	I期
153	e	3.95m	1～1歳半	男	II期
2	g	4.3m	20歳代後半	女	II期

表2 ハプロタイプ16

土壙墓	土壙墓群	標高	年齢	性別	時期
51	c	5.2m	40～59歳	男	I期
58	d	5.7m	40～59歳	男	I期
134	e	4.2m	20～39歳	男	II期
140	e	4.05m	3歳前後	—	II期
141	e	4.3m	13～14歳	女	II期
133	f	4.2m	20～39歳	男	II期
30	h	8.4m	40～59歳	男	III期



墳墓がd群に位置する。第105号土墳墓がb群、第153号土墳墓がe群、第2号土墳墓がg群である。ハプロタイプ10の血統もI期からみられ、II期まで確認できる。ハプロタイプ10・16から複数の血縁がI期から居住していたことが分かる。集落規模が拡大したII期に外部からの移住者がいたと思われ、こうした人々を抱え込んだことが複数のハプロタイプがみられる理由と言えらるだろう。判明した年齢層は、幼児、乳児が多い。後述する沢田遺跡は約4割が未成年者であったが、村松白根遺跡は子どもの比率がさらに高い。

### (3) 副葬品

副葬品は29基で確認されている。これは全体の18%である。副葬品は銭貨、かわらけ、陶器、切羽、貝、礫で、銭貨は数枚出土しているものが多く、六道銭と考えられる。六道銭は新生児、乳・幼児の土墳墓7基においてみられ、大人と副葬品の内容に差はない。20～39歳に比定される男性に銭46枚が副葬されたものが1例ある。布状の物質が付着したものが認められ、緡銭は繊維質のものに入れられていたようであり、おそらくは頭陀袋と思われる。これを除くと副葬品の数は少ない。優品もないことから、副葬品からは階層差は見出せず、集落の居住者の階層差があまりない集団であったと考えられる。

### (4) 埋葬地から考えられること

①土墳墓が群を成しており、それらは集落に暮らした複数家族の集団墓と考えられる。1つの土墳墓群は10基から20数基から成る。DNAの分析結果を踏まえれば複数の家族が想定され、おそらくは各建物で生活を送っていた幾つかの家族が埋葬されたものであろう。

②乳幼児も含めた未成年が一定数確認され、老若問わず土墳墓に埋葬されており、このことから家族墓と捉えることができる。

③副葬品は突出した優品はなく、集落居住者の階層は比較的均一であったと考えられる。

④北部のa・b群が最も古く、それに続くのがc・d群でこれらもI期に遡る可能性がある。c・d群以降は調査区中央部で墓域が推移していく。墓域は集落が南部に移ったIII期もII期までと同様に調査区中央部にあり、埋葬する区域として認識されていたのではないと思われる。

## 2.4 小結—村松白根遺跡の特徴—

これまで述べてきたことから、村松白根遺跡について以下の点が指摘できる。

①製塩を行った場所、集落、埋葬地が一定範囲に纏まる生産・生活の場であった。

②主要生業は製塩で、その他に漁撈、農業、鍛冶等も行われていた。漁撈、農業は小規模なもので自給用であったのだろう。畠の畝跡は小範囲で収穫量は多くを見込めるものではない。畠は黒色土の整地面で確認されているが、整地面は一義的には生産と生活の場を確保するためのものであり、農耕は限定的で、農作物は主に他からに依拠していたと考えられる。漁撈もまた、土錘の数はさほど多くはなく、食糧獲得は副次的であったと思われる。海岸で採取可能な貝類が多量に出土しており、食用、製塩釜の部材、さらには整地面の土固めにも利用されていた。武具類の製作も行われていたようで、複数の生業が看取される。

③製塩は一貫して海側で行われていた。海に近い所が製塩に適しており、風塵によって砂に埋もれば、新たに整地面を造成することを繰り返していた。これに対し、集落は時期によって場所を変えており、砂の堆積によって生活面が埋もれば居住地を移していた。

## 3. 沢田遺跡における生業と埋葬

沢田遺跡は製塩遺構と埋葬地は発掘調査で明らかとなっているが、集落の位置は不明である。製塩遺構は黒色土の整地面が造成されているのは村松白根遺跡と同じであり、土墳墓に埋葬したと考えられる人骨が多数出土していることか

ら、付近に集落が存在したと思われる。本章では、沢田遺跡の生業と埋葬地を確認し、村松白根遺跡との共通点を捉えることにしたい。

### 3.1 生業

#### (1) 製塩

製塩遺構は、釜屋、鹹水槽、土樋があり、村松白根遺跡と同じである。釜屋は128棟、鹹水槽が1300基検出されており（茨城県教育財団 1989, 1992, 1995, 1996, 2000）、村松白根遺跡より遥かに多い。この数は近世後半の遺構も含めたものであるが、近世以降の製塩は小規模であって、製塩遺構の多くは15世紀～17世紀前半のものである。おそらく製塩の規模としては沢田遺跡の方が大きかったと考えられる。沢田遺跡は海岸線沿い2km以上発掘調査されており、釜屋、鹹水槽等から成る製塩遺構が幾つかに纏まる様相が看取される。第1次から第4次、第7次、第8次調査区では製塩遺構が多く、その中でも第2次から第4次調査区では層位的に製塩遺構を捉えることが可能である（財団法人茨城県教育財団 1992）。以下、第2次から第4次調査区の製塩関係の遺構についてみていきたい（図12）<sup>16)</sup>。

製塩遺構の標高は3m～12mであるが、概ねは標高4m～11mで検出されている。正確な年代比定がされていないが、遺跡の存続期間から下層は凡そ15世紀、最上層は19世紀代に下る可能性があるものの、上層は概ね17世紀前半と捉えられる。製塩遺構が検出されている標高4m～10mは出土した陶器、土器類から15世紀～17世紀前半と考えられる。標高4m～10mでは、製塩遺構が途切れることなく検出されており、製塩が連綿と続けられたことが分かる。こうした継続的に操業されていた製塩のあり方は村松白根遺跡と共通している。特に、標高6m～10mで比較的多く検出されており、製塩の最盛期と言ってよい。

製塩遺構はランダムに分布するのではなく、数箇所には纏まっており、製塩遺構群をグループa

～nの14に区分した。このことから、製塩を行った複数の集団を考えることができる。各グループで製塩遺構は重層しているが、検出標高に差がみられ（図12）、それぞれの操業期間はやや異なっていたようである。

初期の製塩遺構は標高5m以下で検出されているもので、製塩遺構群グループa・b・d・e・f・i・j・mにおいてみられ、早い段階から複数集団による製塩が行われていたことが考えられる。このうち、製塩遺構群グループmは標高6mより上で製塩遺構はみられず、早い段階で終息している。それから、製塩遺構群グループfは下層の釜屋は1基のみで、その他は標高6m以上で検出されており、初期からの継続性はなく一度途絶している。それ以外の製塩遺構グループcは標高6mから、製塩遺構群グループgは標高7m、製塩遺構群グループnは標高8m、製塩遺構群グループhは標高9mより上で釜屋が検出されており、標高6m以上になると製塩遺構が増加している状況から、製塩の従事する集団が増えたことが窺える。なお、製塩遺構群グループcは標高6m～8mであり、大規模な製塩が終息する17世紀前半以前に終焉したものも一部あった。以上のことから、初期において複数集団による製塩が行われていたものが、さらに従事者が増え製塩が徐々に拡大化したことが考えられる。

沢田遺跡でも土釜の部材であった耳金、吊金具が出土している。さらに、製塩に関わる道具として柄振、担い棒が出土しており（図13）、これらは揚浜塩田を証左するものである。製塩遺構は海岸に沿った砂丘上にあり、東側の海岸近くに塩田が存在したと思われ、この点も村松白根遺跡と同じである。

#### (2) 製塩以外の生業

沢田遺跡では目貫、切羽、筭等の刀装具が出土している。また、土錘も出土しており、漁撈も考えられる。これらは村松白根遺跡と共通した遺物である。筭は金属製と骨角製があり、こ

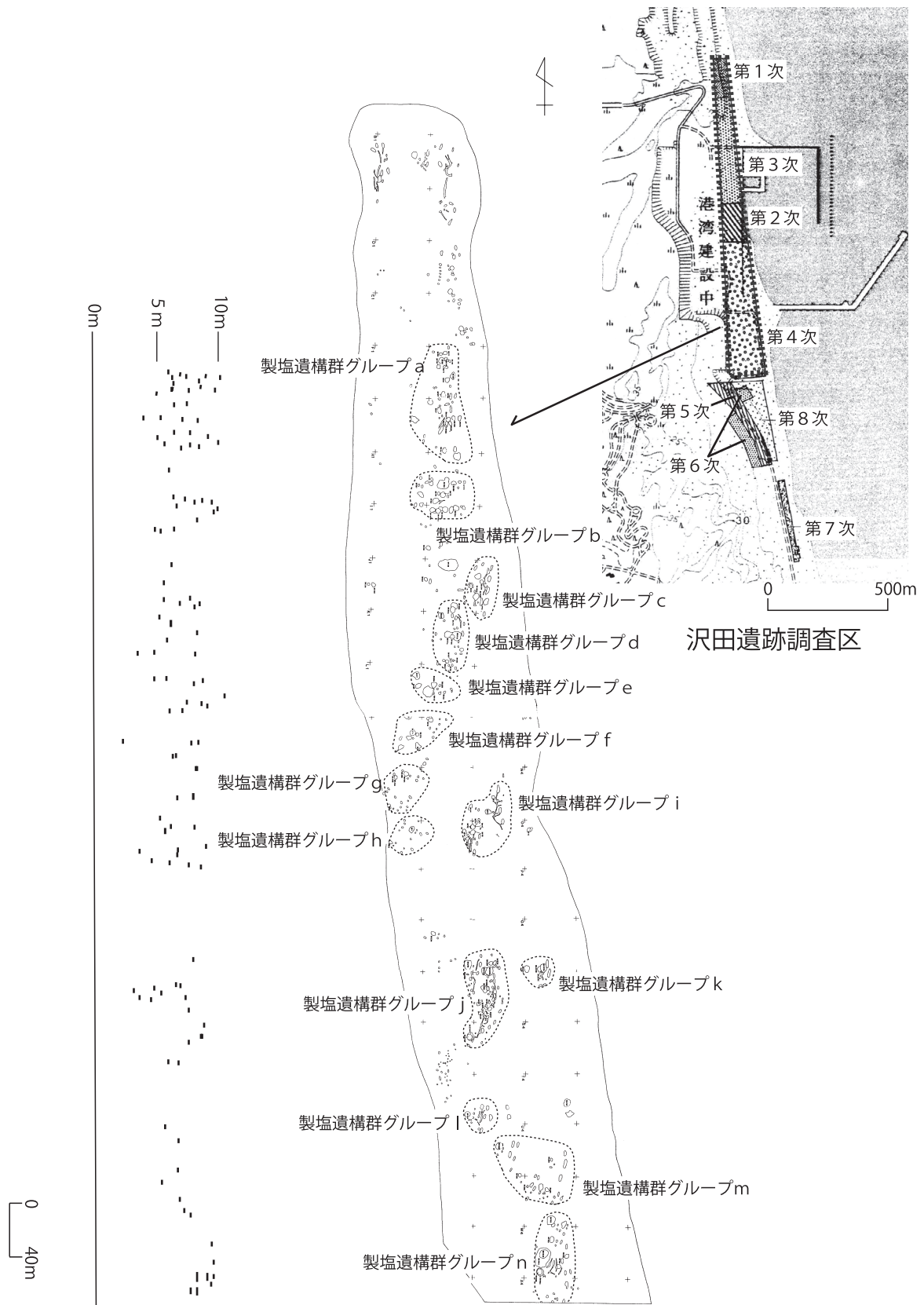
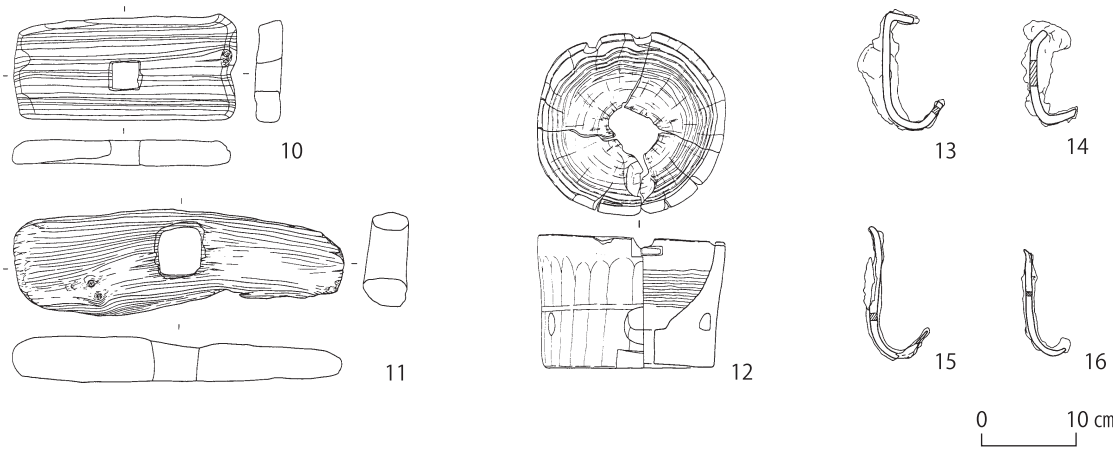
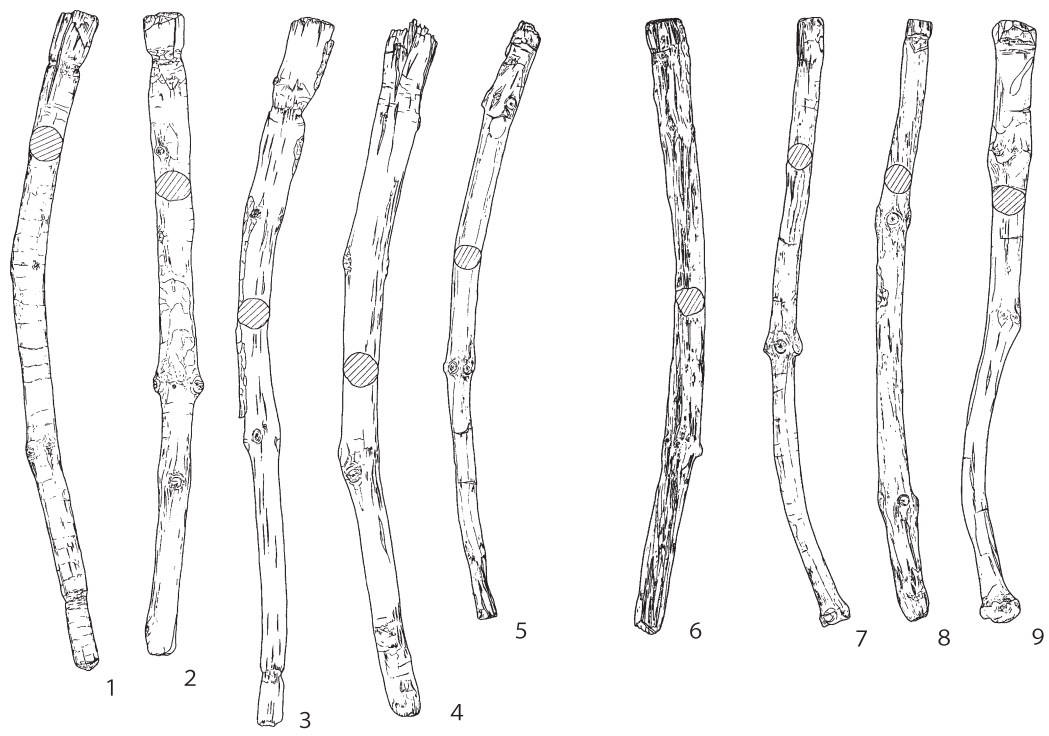


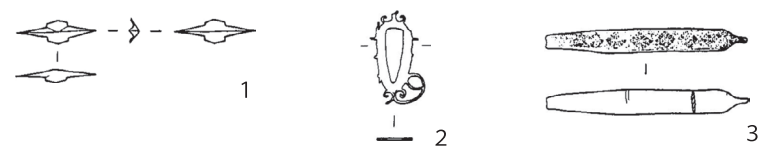
図12 沢田遺跡2～4区製塩跡



0 10 cm

沢田遺跡出土製塩関連遺物

1~9 担棒 10・11 柄振 12 濾過器  
13・14 耳金 15・16 吊金具



1 目貫 2 切羽 3 筭

0 10 cm

沢田遺跡出土刀装具

图 13 沢田遺跡出土遺物

の点も村松白根遺跡と同じである。遺構外ではあるが鹿角を素材とした加工品が出土しており（財団法人茨城県教育財団 1992, 1995）、沢田遺跡で鹿角の加工が行われていたのは確実である。沢田遺跡の集落は不明であるが、これらは集落内での生業に関わるものであろう。いずれも数点が出土しているに留まり、村松白根遺跡に比べると数量は少ない。村松白根遺跡では、こうした遺物は集落で出土しており、沢田遺跡は集落跡が調査対象地外にあると推定され、遺物が少数である理由はそれらを製作していた集落から外れているからであろう。

沢田遺跡でも、武器製作や動物加工が行われており、村松白根遺跡に似た複数の生業を考えることができる。

### 3.2 埋葬地

#### (1) 埋葬地と埋葬形態

沢田遺跡では100体以上の人骨が出土している。埋葬形態は屈葬が多い（財団法人茨城県教育財団 1992）。頭部は北向きが確認できる。攪乱を受けているものが多いが、村松白根遺跡と同様に土壙墓と考えられ、屈葬が多いことも共通している。第2次から第4次調査区では北部（北部土壙墓群）、中央部（中央部土壙墓群）と南部（南部土壙墓群）で人骨が出土している。これらは製塩遺構と近接している。未成年が4割近くを占め、製塩に携わった人々やその家族の墓とみてよいだろう。また、第6次・第8次調査区でも人骨が出土している。このように、土壙墓と推定される人骨の出土は幾つかの纏まりが見出され、この点も村松白根遺跡との共通性が指摘できる。なお、海岸には調査以前から人骨が確認されており<sup>17)</sup>、調査で確認された数よりも多くの埋葬が行われていたと考えられる。

#### (2) 第2次から第4次調査区における埋葬期間

次に、人骨の出土した標高が把握できる第2次から第4次調査区で、埋葬期間を考えてみたい。

北部土壙墓群で出土した人骨は標高およそ5m～12mであるが、標高7m～10mに多い。7m以下は北部土壙墓群のみで、5体が確認できるに過ぎない。中央部土壙墓群では7m以上で人骨が認められる。北部土壙墓群と中央部土壙墓群では標高7m～10mの堆積時期に埋葬が継続的に行われていたことが分かる。南部土壙墓群も人骨が出土しているのは標高7m以上である。北部土壙墓群、中央部土壙墓群と異なり、人骨は10m～11mでやや纏まって出土しており、埋葬の中心となる時期が北部土壙墓群や中央部土壙墓群よりやや遅かったようである（図14）。以上から、北部土壙墓群で最も早く埋葬が開始されるが、埋葬が多く行われたのは中央部土壙墓群とほぼ同時期であり、この頃南部土壙墓群での埋葬も始まり、北部土壙墓群や中央部土壙墓群よりも後の時期まで埋葬が続いたことが言える。

次に、製塩遺構と人骨の検出標高を比較し、時期が並行するのか、あるいは異にするのかを考えてみたい。前述のように製塩遺構は標高4m～10mで多く、北部土壙墓群はほぼこれと並行する。中央部土壙墓群や南部土壙墓群で埋葬が開始され、製塩遺構の数が比較的多い標高10mまでは埋葬人骨が多く、製塩の操業期間と埋葬の時期は並行している。中央部土壙墓群や南部土壙墓群で埋葬が始まり、土壙墓が増える標高7m～10mで製塩遺構がやや増えており、製塩操業が徐々に拡大化していく過程で、集落の人口が増加したと推定される。集落の位置は不明であるが、調査地近辺に存在した可能性が高く、沢田遺跡では子ども埋葬が4割近くもあり、集落に暮らした人々の集団墓と考えられる。製塩が軌道に乗る過程で従事者とその家族の人口増が埋葬数に表れていると思われる。

#### (3) 副葬品

副葬品は六道銭があり、瀬戸・美濃播鉢、皿、碗、常滑甕、内耳土器等が人骨付近で出土しており、副葬品の可能性が指摘されている（財団

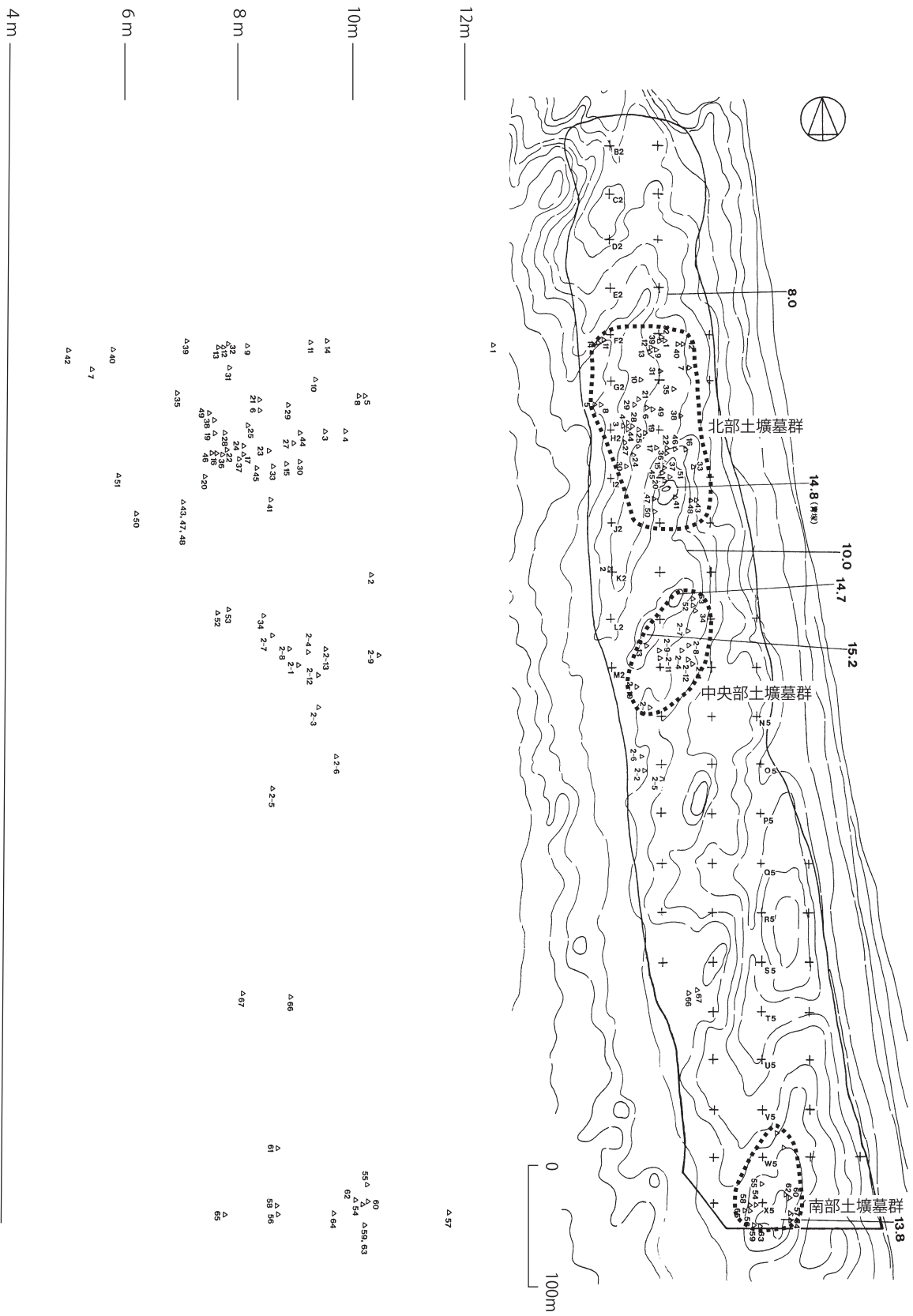


図 14 沢田遺跡土壙墓

法人茨城県教育財団 1992)。副葬品は少なく、この点は村松白根遺跡と共通しており、沢田遺跡も居住者の階層差はあまりなく均一的であったと考えられる。

### 3.3 小結—村松白根遺跡との比較—

沢田遺跡も製塩を主要生業としていたことは明らかである。土壙墓の集団墓で、被葬者は製塩に携わった人々とその家族と考えられる。このような生業の場と埋葬地のあり方は村松白根遺跡と類似しており、集落跡は確認されていないが、村松白根遺跡の状況からみて、集落は近場にあったことが推定される。沢田遺跡の場合、製塩遺構が海岸沿いの砂丘上で南北に亘って複数個所に分布しており、複数の集団によって製塩の操業が行われていたと思われる。こうした複数の集団を念頭に置いた場合、村松白根遺跡Ⅱ期からⅢ期における複数の建物跡群に似た集落像を考えてもよいだろう。沢田遺跡でも製塩以外の生業と理解できる鹿角製品及び鹿角の未加工品の出土は、動物の加工が行われていたこ

とを示すもので、製塩を主体としつつその他の生業も副次的ながら行われていたことを意味している。

## 4. 長砂渚遺跡の生業と埋葬

長砂渚遺跡は調査範囲が村松白根遺跡、沢田遺跡に比べ狭いこともあり、遺構は少ない。製塩遺構と土壙墓が検出されており（茨城県教育財団 2007b）（図15）、村松白根遺跡、沢田遺跡と同様に製塩を主体とし、土壙墓には製塩に関わった人やその家族が埋葬されたと考えられる。製塩遺構は釜屋と鹹水槽があり、標高4mと6mの砂丘で黒色土の整地面上に構築されている。少なくとも製塩は2時期の操業が分かり、砂丘上で埋没した製塩遺構の上に新たに整地している。長砂渚遺跡もまた、砂丘という地形環境であったが故に地固めの整地が必要であり、村松白根遺跡、沢田遺跡と同じ黒色土が用いられている。

釜屋では鯨の骨で作られた柄振が出土している（図15）。柄振は塩分の混じった鹹砂を均す道具であり、おそらくは釜屋内で使用されたもの

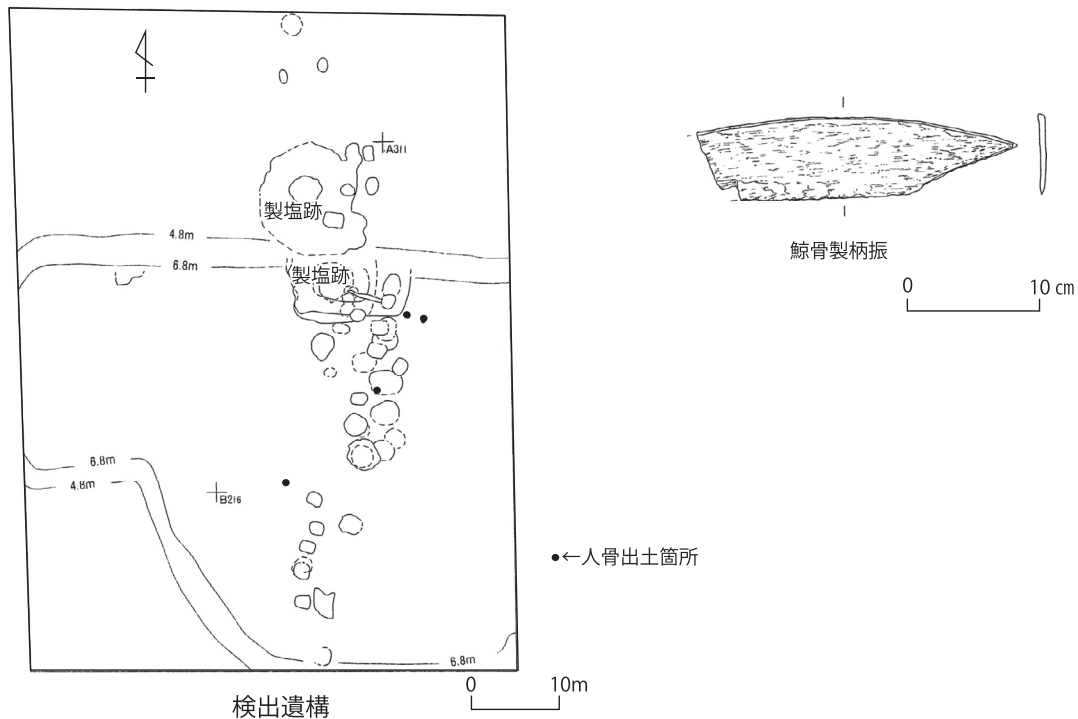


図15 長砂渚遺跡

であろう。製塩遺構が海岸に面した砂丘上に存在することも村松白根遺跡、沢田遺跡と共通しており、長砂渚遺跡においても揚浜製塩を考えることができる。

村松白根遺跡や沢田遺跡では鹿角の加工が行われていたが、長砂渚遺跡では鯨骨の加工をしていたことが分かる。海浜部に立地することから、鯨骨は比較的入手しやすかったものかもしれない。3つの遺跡で共通しているのは動物の加工がされていたということである。長砂渚遺跡も集落は確認されていないが、製塩遺構群と土壙墓からそう遠くはない場所にあったと思われる。動物の加工はおそらくは集落で行われたのであろう。

土壙墓では60歳以上の男性1体、40歳以上の女性2体、新生児1体の埋葬が確認され、村松白根遺跡のような家族墓と捉えることができる。遺構外ではあるが銭貨が90枚以上出土している。銭貨が多いことも村松白根遺跡と共通している。

長砂渚遺跡も海岸に沿った砂丘上に立地しており、製塩遺構や墓の存在から村松白根遺跡、沢田遺跡と同様の製塩主体の海村と考えられる。

## まとめ

これまでの分析によって、茨城県中部の3つの遺跡から太平洋岸の砂浜で製塩が組織的に行われ、従事者の集落が形成されたことが考えられた。揚浜製塩には海水の汲み出しに多大な労働力が必要であり、そのための集団を組織することが不可欠であったと考えられる。村松白根遺跡、沢田遺跡における複数の製塩遺構群は、組織的な製塩が行われていたことを示すものである。

村松白根遺跡が製塩従事者の集落であったということについては従前の調査・研究（財団法人茨城県教育財団 2005, 2007a、茨城県立歴史館 2012）でも指摘されているが、本稿では集落の様相をより具体的に把握するため、集落変遷を調査報告書よりも詳細に追究すると共に、集落の建物構成数を検討し、さらに土壙墓や製塩遺

構の時期変遷に着目することで製塩従事者集団のあり方についても検討した。土壙墓については人骨のDNA分析結果も活用することで、I期からII期、III期にかけて数世代の血縁が集落に暮らしたことが、集団を構成した複数の家族を考察することができた。これらの分析を通して、集落の様相をさらに多面的に捉えた。

本稿で検討した考古学的視点に即してみると、村松白根遺跡は当初の15世紀後半は少数の建物が分散した小規模であったものが、15世紀末～16世紀前半に建物が集合する複数の建物跡群が出現した。このことから、この時期になると製塩操業に複数の集団が関わったことが考えられる。製塩の拡大は製塩遺構群の数が増えていることから看取される。建物跡の整地面には1棟ないし大・小2棟の建物が確認でき、おそらくはこれが1家族の居宅であり、1棟の場合は作業場も兼ねていたとみられる。こうした建物が数棟集まったものが、1つの集団が居住した建物跡群と見做すことができる。II期後半には方向を同じくする建物が集まったものが出現し、方向の揃った建物群の集落はIII期へと継承された。III期には建物群は2箇所となり、II期の複数の集団が2つの集団に集約して再編成されたことが推察される。

如上の複数の集団は、集団墓である土壙墓群の存在からも看取される。土壙墓標高の高低差からは長期の埋葬が窺え、前記のDNA分析から数世代に亘る居住や複数の血族を考察することができることも符合している。集落は3回変遷しており、それぞれ場所が異なり居住地を移動させている。これは、強風による砂の堆積が起因していると考えられる。砂丘は地盤も脆く日常生活に適した場所ではないが、大量の整地土を運び込んでまで生活したのは、製塩を行う上ではこのような場所に暮らす必要があったからであろう。こうした環境の中に集落が形成されたこともこの地域の特徴の1つに挙げられる。

沢田遺跡と長砂渚遺跡も村松白根遺跡と地形



環境が同じであり、沢田遺跡の場合、製塩遺構や土壙墓に複数の纏まりがみられることから、複数の集団が居て、近辺に集落が存在したことが考えられる。沢田遺跡は製塩遺構群が多く、大規模な製塩が行われていたことが分かる。おそらく製塩に従事した集団の数も村松白根遺跡よりも多かったであろう。村松白根遺跡では製塩遺構群が海側にあつて集落は西側に位置しており、沢田遺跡も製塩遺構群が海岸沿いの砂丘上に南北に分布することから、製塩遺構群の西側に集落が存在したことが推定される。

沢田遺跡の製塩遺構群をみると、砂丘上に釜屋とそれに付随する鹹水槽等の施設が一定間隔に存在しており、これは村松白根遺跡のⅡ期以降にも当てはまる。両遺跡の中間に位置する長砂遺跡にも釜屋がみられることから、海岸線沿いの砂丘上に製塩施設が相当数存在した可能性がある。中世においては瀬戸内や伊勢が製塩の中心的地域と考えられてきた（渡辺 1980）が、常陸中部の太平洋岸も中世後期にはかなりの規模の製塩が行われていたと言えるだろう。

主要生業は製塩であるが、その他に漁撈、農耕、鍛冶、金属や武具類、骨角製品の加工等が行われており、複数の生業が捉えられた。村松白根遺跡では農耕や鍛冶、製品の加工は集落内で行っていたと考えられ、漁撈は小型の環状土錘から南方の新川、あるいは真崎浦での小規模な漁を考慮することができる。村松白根遺跡の複数生業については既に触れられている（茨城県立歴史館 2012）ことではあるが、本稿では生産活動を行った建物跡や出土遺物を分析することで村の生計維持に複数の生業が不可欠であったと解した。沢田遺跡でも、製塩以外の生業が確認できた。製塩を主体とするが、海洋資源に特化せず複数の生業によって存立していたことがこの地域の海村の特徴と言えよう。製塩以外は副業的に行っていたと思われるが、村が単一生業のみで成り立つものではなかったことを示すものである。

中世の海村は各地域の地形や環境資源によっ

て、漁撈、製塩、農業、林業（山野の利用）等生業は様々であったと考えられる。山野海河の可能な資源をどのように利用するかで生業が複数となり、海村の生業の多様性を考えることができる。海岸地形が岩礁か砂浜で、そこから得られる主要な海洋資源も異なっていたはずである。海洋資源としては、魚貝類、海藻あるいは塩の元となる海水等様々であったことが考えられ、こうした資源の利用の頻度、組み合わせによって海村の類型は多岐にわたっていたと思われる。例えば、戦国期の伊豆では農業、漁業、製塩が一体的に行われていた村落があり（盛本 1994）、各生業の比重は各地域、さらには村々で異なっていたことが推定される。このように、海村と一口に言っても、主体が漁撈、製塩、農業かという類型区分が可能であり、それぞれの主体となる生業に複数の生業が組み合うというのが、中世海村の生業のあり方であったと言えるだろう。

本稿では、砂浜沿いの製塩主体の海村について検討してきたが、このような村でも、複数の生業が確認でき、多様な生業の上に村が維持されていたことが考えられた。製塩を主体的に行い、漁撈、農耕、鍛冶、金属、骨角製品の加工等を副次的生業が合わさったものを、茨城県中部における中世海村の一類型として提示したい。

## 注

- 1) 大塚民俗学会編1972『日本民俗事典』桜田勝徳氏記述の「海村」によると昭和初期頃より用いられるようになったという。
- 2) こうした見解は民俗学においても指摘されている。安室知氏は「海の生業」の特徴の1つとして村が「多様で豊富な資源」を持ち、「稲作、畑作、狩猟、漁撈、海藻や薪木の採集、開運、海産物の行商」を挙げ、こうした複数の生業を合わせる志向性を持ったことを指摘している（安室 2008）。
- 3) 海岸部の村落を漁村と言ってしまうと漁撈が主体と認識される可能性があり、漁撈以外の生業を考慮すれば海村という用語が適切と考える。

歴史学においても既に海村が定着していることも踏まえ、本稿でも海村を用いることにしたい。考古学ではこれまで海岸部の村落について積極的に論じられてこなかったが、海村の用語を取り入れるのが適当と考える。

- 4) 考古学の場合、縄文時代以降、製塩土器を中心に近藤義郎氏（近藤 1994）、渡辺誠氏（渡辺 1994）らが研究してきた経緯がある。原始・古代は藻塩焼と呼ばれる、海藻に付着した塩分を海水で溶かして濃い塩分にしたものを土器（製塩土器）で煮詰める製法と考えられている。9世紀頃より塩浜での製塩に移行したとされる（たばこと塩の博物館 2015）が、中世に関しては製塩遺構の調査事例が極めて少ないこともあって考古学の側では殆ど顧みられることがなかった。
- 5) 本稿では建物跡を中心とする居住に関わる遺構群を集落と表記する。
- 6) 挿図では建物跡はSI、製塩遺構群をSHと表記している。図3以外も建物跡、製塩遺構群は同様の表記をしている。
- 7) 報告書（財団法人茨城県教育財団 2007a）でI期に括られた遺構は、平面図では近接して見ただけで同時期のように思われるものも、標高差がある。村松白根遺跡は自然に堆積した砂と人為的に盛られた黒色土が相互に堆積しており、標高が低くければ古く、新しくなるにつれて標高が高くなっていく。したがって、遺構の検出された標高の高低が時期差となる。
- 8) 粘土貼土坑は性格不明とされているが、村松白根遺跡では多く検出されている。砂地に掘った穴に粘土を張り付けたもので、製塩の鹹水槽と似た造りである。粘土を張り付けていることは壁面の崩落防止、水漏れ防止の作用があったと考えられ、何等かの作業に関わる遺構と考えて差し支えないだろう。
- 9) 第62号建物跡は第63号建物跡整地面下で検出されている。第73号は建物方向からみて第62号建物跡または第63号建物跡と並存した可能性があり、2棟で構成されていたものと思われる。
- 10) ここで言う家とは、中世後期の一夫一婦婚により形成された家族形態とみておきたい。坂田聡氏は中世後期に一夫一婦婚の父系直系家族が数世代継承されていくことを説いており（坂田 2011）、こうした家の集合体がII期以降の集落と考えることができるだろう。
- 11) 廣山1983では土釜（貝釜）の分布は若狭湾、駿河湾、東京湾、陸奥湾、青森県太平洋岸で確認できる。また、東日本の太平洋岸、日本海岸で土釜の存在が推定されるとしている。茨城県南

部の鹿島灘は推定範囲とされているが、茨城県中・北部は推定範囲外である。村松白根遺跡、沢田遺跡、長砂渚遺跡から、廣山1983で漏れていた茨城県北部の海岸で中世後期に土釜の揚浜製塩が行われていたことが明確となった。たばこと塩の博物館2015では茨城県太平洋岸は鉄釜の分布が表示されている。東京湾奥部で土釜が示されているのは廣山1983と共通しているが、たばこと塩の博物館2015も土釜は明記されていない。鉄釜が土釜に先行する可能性もあるが、その点は不明である。

- 12) 報告書（財団法人茨城県教育財団 2005, 2007a）では「製塩遺構」という言い方をされているが、ここでは釜屋、鹹水槽等の製塩遺構の纏まりを製塩遺構群という表現をしておく。
- 13) 注7で述べたように、下層より徐々に堆積しているもので、標高が低いものが古く、高くなるに従い遺構の時期は新しくなると考えられる。これを示したのが図11で、各点は土墳墓であり、縦軸で標高の高低を、横軸で各標高の土墳数を表した。
- 14) I期の建物跡は標高3.4mのものが1棟ある他は標高4.3m以上で検出されており、建物跡の標高に比べ土墳墓b群の方が、標高が低い。
- 15) 坂平2007は、ハプロタイプ10・16は現代にもみられるものとし、一概に母系の血縁集団とは言えないとしている。ただ、西本2007の見解では母系血族としており、本稿もこの意見に従いたい。
- 16) 検出土層が報告書では全て明記、図示されていなく、土層のみでの把握が困難である。一方、遺構は標高で数値化されているので、標高で全体を俯瞰的にみるのが可能であり、標高で上下の新旧を相対的に示すこととした。
- 17) このことについて稲田健一氏にご教示頂いた。

## 引用・参考文献

網野善彦

- 1980 「平安時代末期～鎌倉時代における塩の生産」『日本塩業体系 原始・古代・中世（稿）』日本専売公社。
- 1984 『日本中世の非農業民と天皇』岩波書店。
- 1985 「中世の製塩と塩の流通」『講座日本技術の社会史2 塩業・漁業』日本評論社。
- 1995 「荘園に生きる人々」『中世のムラ 景観は語りかける』東京大学出版会。

安室 知

- 2008 「重層する海と里」『日本の民俗1 海と

- 里』吉川弘文館。
- 財団法人茨城県教育財団
- 1989 『沢田遺跡 常陸那珂港関係埋蔵文化財調査報告書1』。
- 1992 『沢田遺跡 常陸那珂港関係埋蔵文化財調査報告書2』。
- 1995 『沢田遺跡 一般県道水戸那珂湊線改良工事地内埋蔵文化財調査報告書』。
- 1996 『沢田遺跡 国営常陸海浜公園整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』。
- 2000 『沢田遺跡 国営常陸海浜公園整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書2』。
- 2005 『村松白根遺跡1』。
- 2007a 『村松白根遺跡2』。
- 2007b 『長砂渚遺跡 常陸那珂港関連用地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書』。
- 茨城県立歴史館
- 2012 『霞ヶ浦と太平洋のめぐみ ―塩づくり―』。
- 小野正敏
- 2010 「中世の遺跡にみる生産と場」『近世東アジアにおける技術と交流と移転―モデル、人、技術―平成18年度～平成21年度科学研究費補助金（基礎研究A）研究成果報告書』。
- 近藤義郎
- 1994 『製塩土器の研究』青木書店。
- 坂田 聡
- 2011 『家と村社会の成立―中近世移行期論の射程―』高志書院。
- 坂平文博
- 2007 「村松白根遺跡出土中世人骨のDNA分析」『村松白根遺跡2』財団法人茨城県教育財団。
- 白水 智
- 1993 「中世海村の百姓と領主」『列島の文化史』9: 109-142 日本エディタースクール出版部。
- たばこと塩の博物館
- 2015 『たばこと塩の博物館 常設展示ガイドブック』。
- 西本豊弘
- 2007 「村松白根遺跡の人骨について」『村松白根遺跡2』財団法人茨城県教育財団。
- 春田直紀
- 1995 「中世の海村と山村―生業村落論の試み―」『日本史研究』392: 34-61。
- 2010 「中世海村の生業暦」『国立歴史民俗博物館研究報告』187: 51-80。
- 廣山堯道
- 1983 『日本製塩技術史の研究』雄山閣出版。
- 森 格也
- 1993 「瀬戸内地方の中世集落の展開―讃岐を中心として―」『研究紀要』I 香川県埋蔵文化財センター。
- 盛本昌弘
- 1989 「中世東国における塩の生産と流通」『六浦古文化』45: 15-29。
- 1994 「後北条領国における海村の負担」『歴史手帳』22(11): 11-29。
- 2009 「資源管理をめぐる研究と課題」『中近世の山谷河海と資源管理』岩田書院。
- 渡辺則文
- 1971 「中世塩業の展開」『日本塩業史研究』三一書房。
- 1980 「中世の製塩技術」『日本塩業体系 原始・古代・中世（稿）』日本専売公社。
- 渡辺 誠
- 1994 「藻塩焼」『風土記の考古学 I』同成社。

### 挿図等出典

- 図1 筆者作成
- 図2 II期2群建物跡は茨城県教育財団2007に加筆、I期～III期模式図は筆者作成
- 図3 茨城県教育財団1992・2007aに加筆
- 図4 茨城県教育財団2005に加筆
- 図5 茨城県教育財団2007aに加筆
- 図6 茨城県教育財団2007aに加筆
- 図7 茨城県教育財団2007aに加筆
- 図8 茨城県教育財団2007aに加筆
- 図9 筆者作成
- 図10 茨城県教育財団2007aに加筆、土壙墓群の変遷は筆者作成
- 図11 筆者作成
- 図12 茨城県教育財団1992・2000に加筆
- 図13 茨城県教育財団1992に加筆
- 図14 茨城県教育財団1992に加筆
- 図15 茨城県教育財団2007bに加筆
- 表1・2 筆者作成

# Medieval Salt-making Villages on Ibaraki Prefecture's Pacific Coast

EIKOSHI Shingo

Department of Japanese History,  
School of Cultural and Social Studies,  
SOKENDAI (The Graduate University for Advanced Studies)

## Summary

This paper considers from an archaeological point of view the medieval coastal villages close to the Pacific coast of Ibaraki Prefecture that produced salt as their main means of subsistence. In all likelihood, medieval Japanese coastal villages varied widely depending on their geographical location and the available resources. This paper presents an analysis of three archaeological sites—Muramatsushirane, Sawada and Nagasunanagisa—located on sand dunes on what is now the central coast of Ibaraki Prefecture.

As the salt-producing facilities at Muramatsushirane were distributed near the coast, it seems the tasks making up the salt-production process were conducted on the salt terraces themselves. At the settlements of the Muramatsushirane site, buildings were distributed inland of the salt-producing area. From the fragments of the clay saltpans used for boiling down seawater in the furnace hut found in these buildings, we can deduce that the buildings were likely inhabited by those who were engaged in salt production.

The settlement at the Muramatsushirane site lasted from the second half of the 15th century to the first half of the 17th century. At the beginning of this period, the buildings were spread out; then, from the end of 15th century to the first half of 16th century, several clusters of buildings appeared. The increase in the number of buildings implies an increasing number of salt workers, and the presence of several salt-producing groups. Throughout the entire settlement period, each Muramatsushirane house consisted of either a single building or one larger and one smaller building, both of which are thought to constitute a single household.

Also through all periods of the Muramatsushirane site, salt-making facilities were positioned in the same place near the shore, presumably to allow easy access to the seawater.

Graves for settlement inhabitants were found on the site. The lack of any great differences among the objects buried along with the bodies suggests the existence of a relatively egalitarian social system within each village.

At the Sawada and Nagasunanagisa sites, salt-producing facilities and grave pits were found, although settlements were not. As with Muramatsushirane, these sites can be classified as coastal villages that produced salt as their main form of subsistence, although it should be stated that daily life also involved fishery, agriculture, metalwork, and the making of tools out of bone and antlers. Indeed, as a coastal village could not be maintained through just one means of production alone, this reliance on multiple means of subsistence could be seen as an important characteristic of these villages. Thus the villages dealt with in this paper can be categorized as a type of medieval coastal village that produced salt as the primary, but not exclusive, means of subsistence.

**Key words:** coastal village, salt production, settlement, multiple means of subsistence, grave